
アンバランスカップル

淡雪ぼたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンバランスカップル

【Nコード】

N3512T

【作者名】

淡雪ぼたん

【あらすじ】

高級ホストクラブ ナンバーワンの、若々しく素敵な青年 霧夜と、母親に束縛され続け愛の無い家庭で育ち、トラウマを抱える地味で垢抜けない33歳の真帆・・・。 真帆はショーウインドに映る、自分と霧夜をまじまじと見る。 背がスラッと高く、ファッション雑誌のモデルが抜け出たように素敵で、カリスマ性がある、世の女性がみんな振り返るような若々しい美しい男性と、空気のような存在で目立たなくて、地味で、何の特色もないおばさん・・・。

親子か？って程ではないにしろ、仲の良い姉

弟？って感じにも見える．．．。 真帆「こっやって並んで見ると、とってもアンバランスなカップルに見えない？」 霧夜「アンバランスってさ、支点をずらすと良いバランスがとれるんだぜ。（中略）俺達はお互いの心の傷をよーく知ってて、自分の痛みの方に感じとる事が出来てさ．．．。愛に飢えてて、心の淋しさもしつてる．．．。そして愛する事、愛される事も不器用で．．．。俺、分かるんだ。愛に飢えたあんたの事、いっぱい愛してあげたいし、包んであげたいし、暖めてやりたいし．．．。いっぱい幸せにしてやりたいんだよね。」

そして俺の事もいっぱい愛して欲しいんだよね。俺達、史上最高のお似合いのカップルだぜ。」 そんな2人の純愛ラブストーリー。 《携帯小説サイト「フォレスト」から、こちらに引っ越して来ました。》

第1話 最初で最後の初来店（前編・出会い）

うっとおしい雨の日が続く梅雨時の頃だった……。

六本木の高級ホストクラブ 『club ピュア』

お店のドアを恐る恐る、躊躇うような表情で開けて、立っていた彼女……。

化粧してるのかしてないのかわからない様な地味な薄化粧に、あまり手入れしてないようなロングヘアを、後ろで飾りのない黒ゴムで一つに縛って、小太りで、見るからにダサい田舎のおばちゃん風……。

昭和初期の映画から出てきた様な、物凄く地味なやぼったい30代の女性が立っていた。

……昭和初期コーデガール

「いらっしやいませ！！ ようこそ！ ピュアへ……」
店員全員で威勢よく元気に挨拶する。

「あ……。初めてなんですけど、予算20万円ぐらいでも、大丈夫でしょうか？」

「初来店で、ホストクラブ初心者の方ですね。
初回の方は、初回料金で料金がお安くなるサービスが付いてますから、十分楽しめますよ。」

その予算でしたら、うちのナンバーワンの御指名も出来ますが、いかがなさいますか？」

お店のマネージャーが愛想よく説明する。

「あの．．．。分からないので、お任せします」

「また詳細は、後で店長がご挨拶に行きますので、その時にご説明致しますので、ご安心下さい。
それじゃあお席にご案内します」

「はい」

お店の奥の方の席に通されて、ぎこちない感じで席に座る。

まず店長がやってきて、名刺を渡す。初回のコースについての説明と料金を教えてくれた。

料金は2時間¥3000と¥5000で、料金の違いは飲み物の違いで、特別メニュー意外の飲み物は、飲み放題だ。

『男メニュー』を渡されて、その中には顔写真と簡単なプロフィールが書かれていた。

「お気に召すホストはいますか？」と聞かれて、その女性は動揺した感じで焦っている風だったが、やがて、「じゃあこの方を．．．」と店のナンバーワン『霧夜』を指さした。

「かしこまりました」

赤ワインのウエルカムドリンクをプレゼントされ、席を去って行った。

次に、店内にいるホストが入れ替わり立ち替わり、席に来て、挨拶をしたり、楽しいトークサービスをした。

初回の場合は、顔見せのような感じで店のホスト全員が挨拶にやって来る。

それから、霧夜のサポートのホストの『影虎』がやって来た。

テーブルの前で両膝を付いてグラスを両手で持って、とても礼儀正しい。

「一緒にしても宜しいでしょうか？」

「あ、はい」

影虎は、母性本能をくすぐりそうな、愛嬌のある可愛い系の草食系イケメンクンと言う感じで、物腰には癒しを感じさせる柔らかさを持っている。

影虎は名刺を渡して、丁寧に挨拶し、暫くお喋りした後には名前を聞かれ、彼はコースターの裏に彼女の名前を書いて伏せた。

暫くしたら、店のナンバーワン『霧夜^{きじや}』が席に付いた。

「はじめまして．．．。ご指名いただきありがとうございます」

ナンバーワンだけあって、背が高く非常に整った綺麗な顔立ちで、凛とした中にクールさも漂い、頭も切れる感じだ。

年は23歳ぐらいだろうか．．．。

「は．．．はじめまして．．．」

彼は影虎が書いて伏せたコースターをそっと見て、優しい笑顔でこつちを見た。

「佐倉崎 真帆さん．．．。素敵なお名前ですね」

「あ、ありがとうございます」

「宜しかったら名刺どうぞ」

霧夜が自分のメールアドレスと携帯番号の書かれた名刺を渡す。

「もしお嫌じゃなければ、真帆さんのメルアドを伺ってもも宜しいでしょうか？」

「私の？」

「お嫌じゃなければ・・・」

「いいですけど・・・。私、携帯を購入したばかりで、操作が良く分からなくて・・・」

「メールを送った事がないのですか？」

「はい」

「もし差し障りなければ、僕が登録操作しますが・・・よろしいでしょうか？」

「はい、じゃあおねがいます」

真帆は、バッグからホワイトパールの携帯を出して、霧夜に渡した。ストラップもついてない、見るからにピカピカの新品と言う感じだ。霧夜は丁寧に両手で携帯を受け取ると、ポケットからメタリックブラックの自分の携帯を出して、手慣れた感じで、赤外線通信を使ってメルアド登録した。

「まあっ。凄いこんな事が出来るんですね」

「ついでに短縮1番に僕の携帯番号を入れてもいいでしょうか？」

「短縮1番？」

「ほらっ。こっちやって1を押して、電話マークを押すと、俺にかか
る……」

「面白い！！ すごいですねー。じゃあ是非……」

無邪気に笑うこの女性……。

何て無防備な田舎のおばちゃんって感じなんだろう……。
落とすのも簡単そうだ……。

霧夜は心の中で、いいお得意様になるかもと喜んだ。

暫く話したら、霧夜が神秘的な深い眼差しを送って来た。

「席を真帆さんの隣に移ってもいいですか？」

「えっ？ い……いいですけど」

霧夜が隣に座ったら、真帆は真っ赤になってはにかんだ。

「初めてだそうですが、お店の雰囲気はいかがですか？」

「物凄く場違いな感じで恐縮してますが、今日は自分へのお祝いに、
初めてこう言ったお店にチャレンジしてみました」

「お祝い？ 何だろう……誕生日とか？ 表彰されたとか？」

「いいえ……ぜんぜん」

「何だろう？」

「やっと自由になれたから……。今まで頑張りぬいた自分への

お祝いなんです」

「え？」

突拍子もない答えにいつも冷静な霧夜の目が点になった。

「私．．．今までずっと心が自由じゃなかったから．．．。やっと自由になれて解放されたから、今まで出来なかった事をこれから沢山楽しもうと思ってます。今日は、ホストクラブ初体験．．．。でもきつと、今日が最初で最後だと思います」

「そんな事言わずに、又是非いらしてくださいよ」

「でも、やっぱり私には似あわないみたいなのがします」

「そんなことありませんよ。又是非きてくださいね。約束」
霧夜は魅惑的な顔をして、指切りげんまんした。
真帆の小指は火照って、見るからに心臓がバクバク状態なのが感じ取れる。

「でも自由って何だろう？ とても気になるな．．．」

「離婚とかじゃないですよ。私、結婚した事ないし、男性とお付き合いました事ありませんから．．．」

「え．．．」

「私33歳なのですけれど、男性とお付き合いした事もないなんて変でしょ？」

「そんな事ありませんよ。あなたはとても素敵で魅力的ですよ」

「そう言っただけで頂けて光栄です。
でも、自分の姿が人の目にどう映っているのか、大体分かりますし
．．．でも、優しい言葉をかけてくださって嬉しく思います。」

詳しい事は言えませんが、私、母親からずっと束縛され続けてきて、
今まで自由がない生き方をして来ました。

きつとこのまま40歳．．．50歳．．．もしかしたら60歳．．．

自分を押し殺して生きていかなければいけないんだろうなって、絶
望のような、諦めのような、そんなつまらない人生を送って来たの
ですが、突然母が逝ってしまったて．．．。

酷い娘ですよ．．．。

普通親が亡くなったら悲しみで心の中が一杯になるはずなのに、ホ
ッとして、ああやっと自由になれるって、ちょっぴり喜んだりし
て．．．。

きつと私の心の中には悪魔が住んでるんだって、悪い人間だっと思
いました。

でも、束縛からやっと解放されて、肩の荷がおりたって言うか．．．

これからは、今まで出来なかった事を体験して、知らなかった世界
を見て感じて．．．。

自分の為に色々やってみようかって思ってます。諦めてた自分の
人生を、もう一度やり直そうって思ってます」

すごく突拍子もない事を言ってるのだが、そんな事を言う彼女の目
がとても澄んでいて、キラキラ輝いて綺麗に見えた。

よくよく見ると、磨けば光る原石と言うか．．．澄んだ大きな優し

げな瞳に長いまつ毛、色白で肌も綺麗で、彫りも深く整った顔立ちだ。。。

いけない いけない。。。

こんな年上のおばさんに興味を示してどうなるんだ。。。

俺はこの店のナンバーワンだ。。。

商売 商売。。。

「何かいただいてもよろしいでしょうか？」

「あまりお酒が飲めないので、私はソフトドリンクで。。。。でも、知り合った記念に、貴方にプレゼントします」

そう言っただけは、メニユー表からドンペリのピンクを指した。

「宜しいんですか？ 嬉しいな。ありがとうございます」

彼女は暫くの間、霧夜とたあいな会話を楽しんで、幸せそうな表情をして帰っていった。

「今日はどうもありがとう。。。。とても楽しかったです」

「僕の方こそ、真帆さんと知り合えてとても楽しかったです。又是非お店にきてくださいね。。。」

「。。。。」

苦笑して困った顔の彼女。。。

『はい』と言う返事はくれなかった。

それから二度と彼女は店には来なかった。。。

あまりメール攻撃も良くないと思って我慢していたが、全く何も返事が来ないので、時々ソフトな感じのお誘いメールを送ったりした

が、返事はなしのつぶて．．．。

電話をかけてもみたが、いつもお留守番サービスに繋がるだけだった．．．。

この俺がふられるなんて．．．。

こんなの初めてだ．．．。くっそう．．．。

第1話 最初で最後の初来店（後編・再会）

それから3ヶ月・・・。

今日は仕事がオフの日で、渋谷をぶらぶらしていた時だった・・・。

「・・・さん、霧夜さん」

後ろから源氏名で呼ばれて、マズツと思った。

折角の休日、中にはストー力的な客もいる・・・。

邪魔されなくなかったのだが・・・。

だが、あからさまにあしらうわけにもいかない・・・。

営業スマイル顔を作って、クルツと振り返った。

「はい？」

振り返ったら、あの昭和初期コーデガールが立っていた・・・。

正確に言うと、すっかり痩せて、服装もまだダサさは残るけど、あの時と比べたら雲泥の差で、昭和初期ファッションは大分改善されていた。

若干垢抜けない主婦ファッションと言う感じだろうか・・・。

「真帆さん？」

「やっぱり霧夜さんでしたか・・・。もしかしたらそうかなって思ってた・・・。」

「真帆さん、酷いじゃないですか」

「えっ？」

「何度もメールしたのにお返事くれないし、電話をかけても出てくれないし．．．」

「そうだったのですか？」

「そうだったのですかって．．．」

「実は、あの時携帯買ったばかりって言ったでしょ？ 充電の仕方がわからないし、電池切れちゃって、机の引き出しの中で眠ってます」

その話を聞いて、又目が点になった．．．。それから『プーツ』と笑ってしまった。

「あーっ。酷いですね。笑いましたね」

「ごめんなさい。真帆さんって原始人みたいですね」

「なんかシヨック．．．」

「ごめんなさい。可愛らしいって事ですよ」

「本当にそう思ってますか？」

「思ってる 思ってる．．．。僕が充電してあげましょうか？」

「でも、携帯家に置いてきたし．．．」

「家は何処ですか？」

「六本木に引越したばかりなんですが・・・」

「え？ 俺、六本木に住んでるんだけど・・・」

「うそーっ」

「フローラルリース麻布十番ってマンションだけど・・・」

「私そこの10階に越して来たのですが・・・」

「うそ！！ 俺そこの12階なんだけど・・・」

「こんな偶然ってあるのか？！」

「昭和初期コーデガールが俺と同じマンションに？！」

「凄い偶然だね・・・。俺、1215室」

「私、1015室ですよ。1戸おいて真上ですね」

「真帆の目がキョトンと驚いて、大きく見開かれた。」

「ちよつと寒気がして来ますね」

「それって嫌だって事？」

「そうじゃないですけど、こんな偶然って滅多にないですよね？」

「確かに・・・」

お互いに、呆然としてしばらく立ちつくした・・・。

「で・・・是から何か予定はあるの？」

「私、コンサートにチャレンジしてみようかと思って、これからHKKホールでコンサート見る予定なんです」

「え？ 何のコンサート？」

「『Mind Dream』 なんですけど・・・」

「インディーズでベストワンに入った、ヒップホップユニットだよ
ね？」

「はい」

「いいなあ」

「もし良かったら、一緒にしませんか？」

「えっ？」

「私・・・ちょっと神経症で、知らない人が隣に座ると落ち着かなくて・・・。ちょっと恐怖心もあって・・・。一人で見るのにチケツト二人分買ったんです。

通路側の席を2席・・・。通路側に座って、席一つ分空けておけば、何とか大丈夫なので・・・。」

「嬉しいけど、隣に座ってもいいのかな？」

「霧夜さんは存じてる方ですし、一緒に見て貰えると逆に助かるっ
て言うか・・・。」

初めてのコンサートで、実はちょっと緊張してるんです」

「それじゃあ是非．．．」

「良かった」

「じゃあ、まだ時間もあるし、コンサートのお礼させてよ」

「そんな気を使わなくて、いいですよ」

「でもさ、『Mind Dream』のコンサートにその格好はいけないかも．．．」

「だめですか？」

「まだ時間もあるし、僕に任せて．．．」

俺好みのブティックに入って、洋服と靴とバッグを見たてた。

「高いですね．．．。こんなに高いの、私には買えないです．．．」

「気にしないで、プレゼントするからさ」

「でも．．．」

「安心して、恩を着せて、店に来いなんて言わないから．．．」
一式見立てて、彼女に数十万円の物をプレゼントした。
六本木のナンバーワンホストが、この人に数十万円貢君なんて．．．。

俺ってクレイジーって思ったけど、どうしても、この昭和初期コー

デを俺好みに改造したい衝動って言うか．．．。無性にそうしたい衝動に駆られた．．．。

そうしたら俺の気持ちが一掃するようになった．．．。

知り合いのヘアメイクの店で、着替えさせて、ヘアメイクさせて．．．。

出てきた彼女に驚いた．．．。

手を加えたら絶対に輝く原石だと思ったけれど、これ程変わるとは．．．。

雑誌から抜け出たモデル並に素敵になった。

目が点の俺を見て、彼女が不安そうに言った。

「あの．．．変ですか？」

「いや．．．凄く綺麗で驚いたよ」

「本当に？」

彼女をクルッと鏡の方に回転させて、姿を映した。

「どう思う？綺麗だと思わない？」

「なんだか自分じゃないみたい」

「これが本来の君の姿なんじゃないかな？」

彼女はとても戸惑っている感じだった．．．。

これなら俺の隣に歩かせても、つり合うなと気分もすっきり、満足した。

会場について、コンサートが始まると、皆が一斉に席を立ち上がったので、真帆は驚いて辺りをキョロキョロ見回した。俺は彼女の手を引っ張って、立たせて、耳元で聞こえるように大きな声で話した。

「コンサートが始まったら、席に腰かけてたらダメだよ！」
本当に何も知らないんだな……。

そんな原始人昭和ガールが可愛く見えた。

「ほらこうやって、音楽に合わせて手を降ったり、ジャンピングしたり……。皆と同じように……。」

「え……そんなこと……。」

「恥ずかしくないで、思いつきりー!」

真帆は、最初戸惑っていたが、だんだん慣れてきて、ぎこちないながらも一生懸命皆と合わせて、コンサートを盛り上げた。

「やれば出切るじゃん」

彼女を見て、俺はフツと自然と笑がこぼれた。

コンサートが終って帰り道……。
マンションのエレベーターホールの前……。

「今日はどうもありがとうございました。とっても楽しかったです」

「ねえ、又一緒に出かけない？」

「え？」

俺はもつともつと、色々な所に連れまわして、色々な事を見せて体験させたい．．．。このダサかった原始人昭和ガールを素敵な女性に仕上げてみたいと言つ衝動に駆られた。

「嫌じゃなかったら、俺達つきあわない？」

「つきあうって．．．」

「友達になろうぜ」

彼女は物凄く嬉しそうな笑顔を見せて、大きくうなづいた。まるで子供みたいだな．．．。

「ありがとう．．．。とっても嬉しい．．．」

(第2話に続く)

第2話 ストーカー疑惑（前編）

「アニキ……。もしかしてストーカーじゃないっすか？」

霧夜は信頼出来る、可愛がっている後輩ホスト『影虎』に真帆と付き合う事を話した……。

「えっ？」

「だっておかしいじゃないっすか。同じマンション上下に住んでるとか、コンサートのチケット2枚持ってたなんて……。アニキと偶然出会ったのも本当なんっすか？
あまりにも偶然が多すぎないっすか？」

そう言われてみると、変な気もして来た。

「その女性に、いくら使ったんっすか？」

「まあ、服とかバッグ、靴とか……。35万ぐらいかな？」

「アニキっ。そんな中年のパツとしないおばさんに、大金使って……。騙されてるんじゃないっすか？」

マンションなんて、アニキが店から出て来るのを張り込んで、後をつければすぐ突き止められるっすよ。

あらかじめ調べてアニキと同じマンションに越してきて、偶然を装ったんじゃないっすか？」

そんな事を言われると、益々不安になってくる。

真帆が店から出てくる俺を物陰から覗き、俺をつけ回すそんな光景

が浮かんできて、ゾクツとしてきた。

霧夜は過去に傷害事件に巻き込まれるぐらい、ストーカ女性に手痛い目にあっていた。

その時の恐怖が蘇ってきた・・・。

「クラブナンバーワンのアニキが、そんなパツとしないおばさんに騙されたなんて事になったら、アニキの威厳が失墜しますっすよ」

「そう言われると不安になってくるな・・・」

「早めに手を切った方がいいっすよ」

「分かったよ」

言われてみれば、あまりにも偶然が重なりすぎて、影虎の言う事が正しく感じられてきた。

だんだん騙されてたのじゃないかって気持ちが大きく膨らんできて、騙されたと思うと、真帆に対して怒りの気持ちまで浮かび上がってきた。

* * * * *

深夜仕事が終わって、家に帰って来たら、玄関ドアノブに袋がぶら下がっていた。

中を見たら、タッパーに入っただお総菜が色々入っていた。

メッセージカードも入っていて、開いて読んだ。

『この間はどうもありがとうございます。とても楽しかったです。』

高そうな洋服など色々買って下さり、頂戴してしまつて、後からとても図々しくなんて失礼な事をしてしまったのかと反省し、身の縮む気持ちであります。

男の方からプレゼントを頂くなんて、経験がなく、内心どうすればいいのか分からずにパニックで頭の中が真っ白になっておりました。このご恩とお礼の気持ちをどうやって、お返ししたらいいのかと悩んでおります．．．。

いつか大きなご恩返しが出来たらと思っております。

あの日のお礼の比にはとてもなりません、宜しければ召し上がってください。

何の取柄もなく、こんな事ぐらいしか出来ませんが、もしお嫌いじやなかったら、時々作って持って来ますね。

お友達になつて下さつて、ありがとうございます。

とても嬉しくて舞い上がってます。又是非ご一緒させてください．．

。真帆より』

後輩 影虎からストーリー疑惑の話しを聞いてから、霧夜は急に真帆に対しての気持ちが引いてしまった．．．。それと同時にうっとうしい気持ちが沸き上ってきた。

玄関のキーを開けて、家に入って、紙袋をごみ箱に投げ入れた。

一度不信感が出始めると、こう言う事をされるとゾクツとしてしまふ。

「うっぜー」

翌朝、携带着信メールが鳴った。

携帯を見たら、真帆からだつた．．．。

『初めてメールします。これで大丈夫なのかな？ ドキドキしてます。あれから説明書とにらめっこして、やっと充電も出来るようになった、メールも送れるように練習中です。無事に届きますように』

絵文字まで入って、余計イライラ感が高まった・・・。

「マジうっぜーや」

すぐにメール着信拒否にして、電話も迷惑登録にした。

* * * * *

それから数日過ぎた頃だろうか・・・。
エレベーターホールで真帆と出会った。

「霧夜さん、こんにちは」

真帆は満面の笑顔で、手を降ってこっちにやって来た。

霧夜は怒りの様な不機嫌顔で真帆をギツと睨みつけた。

その顔を見て、真帆の笑顔は消え、不安そうな顔に変わった。

「あのさ、この間友達つき合いしようって言ったけどさ、やっぱりやめとくわ。

あんたかなりのおばさんだし、しかもやばったくて、俺とはつりあわねえし。

俺さ、ホストじゃん。言ってみれば女性を口説いて騙すような商売じゃん。

あんたをからかったただけだからさ・・・。だからもう俺の周りうるつかないですよ」

真帆は物凄くショックを受けた表情に変わった。

目は涙でいっぱいになり、今にも溢れそうだった。

顔は青ざめ、こらえそうにキュツと閉じた唇が小刻みに震えてた。

大きな目を一回まばたきした途端、大きな涙が真珠のようにこぼれ落ちた。

涙は長いまつ毛を濡らし、まるでまつ毛に小さなダイヤモンドの粒が付いた様に散らばって、それが妙に美しくなめかましく感じた。

「そうですよね」

「えっ？」

「私みたいな年増女が、霧夜さんとお友達になるなんて事ありえないですよね。」

全然つり合わないし……。

ご迷惑おかけしてごめんなさい。これからはご迷惑おかけしないようにしますから……。」

俺は、更に追い討ちをかけるように彼女に言った。

「あのさ、この間プレゼントした服代だけどさ、返してくんねえ？」

「分かりました。後でお支払いしに行きます」

そう言っただけで彼女は、降りてきて扉の開いたエレベーターにさっと乗り込んで、扉を閉めて上に上がっていった。

* * * * *

それから数日が過ぎたが、彼女はお金を返しに来なかった。

「やっぱり騙されたのか……。チエツ」

そして仕事に行つて、明け方近くに戻つて来て、玄関ポストから新聞を引っこ抜こうとした時に、分厚い封筒が一緒に入ってるのが見つかった。

中を開けたら100万の金がいっていた。

封筒には『真帆』と書かれていた。

「これじゃあ貰いすぎだ．．．」

朝になつて、10階に降りて、金を返そうとして、1015号室に行つたが空き家になっていた。

その空き部屋の隣の住人がいたので聞いてみた。

「あの．．．ここに佐倉崎真帆つて言う人が住んでましたか？」

「はい。そうですけど、一昨日かな？ バタバタと急ぎで引越していきましたよ」

「えっ。何処に引越したか分かりますか？」

「引越しの挨拶はありましたけど、何処に引越すかは言わなかったから．．．」

「そうですか．．．。どうも．．．」

もしかして、俺はとんでもない事をしでかしてしまったんじゃないかって今ごろ気がついた．．．。

それからプツリと彼女の消息は分からなくなった。

あの彼女の悲し気な表情と、大粒の真珠のような涙とキラキラと濡

れたまつ毛が何度も頭の中に浮かび上がっては消える．．．。

もう永遠に会えないのかもれないと思うと、胸が締めつけられて息をするのも苦しいような感覚に襲われる。

たった1日、数時間一緒に過ごしただけなのに．．．。
一緒に笑い合って、はしゃいで、たあいな事を喋って．．．。

考えてみれば、胸が踊るぐらい楽しいと思って心の底から笑ったのは、忘れてしまっぐらいかなり久し振りだった．．．。
彼女が隣に居ると言うだけで、癒されて、寒かった心が温まった．．．。

無くしてしまって、初めて自分の気持ちに気がついた。

『なんであんなパツとしないおばさん．．．』
『ただど理屈じゃないんだ．．．』。

第2話 ストーカー疑惑（後編）

俺は後輩 影虎を攻めまくった。

「お前のせいで、とんでもない事になったじゃないか」

「せ．．．先輩、申し訳ないっす」

「絶対に彼女を見つけろよ。じゃないともうお前には目をかけてやらないからな」

「分かりましたっす」
半べその影虎．．．。

それから俺は荒れまくっていた。

客に高い酒を勧めまくって、飲みまくって、荒稼ぎして、店からは表彰され、今月の給料はついに1000万越えしたが、心は浮かばれなかった．．．。

真帆．．．何処で何をしてるんだろう．．．。
あいつ、泣いてるのかな？

俺は興信所を使って、真帆の行方を探す事にした。

影虎が必死になっても分からなかった真帆の行方だったが、興信所を使ったらアツサリと居場所が分かった。

それでもあれから1ヶ月が過ぎてしまったが．．．。

真帆は浅草橋駅近くのワンルームマンションに移り住み、ピースシヨップで働いていた。

浅草橋はピースの間屋街が立ち並ぶ場所だ．．．。

こんな所に居たとは・・・。

店が休日の日に俺は、彼女の務めるお店に偶然を装って行ってみた。

そこは浅草橋界限では、大きい方の店で5階建てのビルになっている。

興信所の調べでは、4階の金具パーツコーナーで働いているらしい。
。。。

俺は前日、大事にしているシルバーのトライバルペンダントを引きちぎって、壊した。

俺には作戦があった・・・。

* * * * *

店に入っていった、エレベーターで4階まで行くと、物凄い数の金具パーツが所狭しと並んでいた。

圧倒的に女性客が多い・・・。

若い女の子から中年の婦人まで、沢山の女性群が目を輝かせて楽しそうに、あれこれパーツ選びに夢中になっている・・・。

中には男性客もいた。

こんな店に来るのは初めてだから緊張したが、ポツポツではあるが、客の中に男性もいてホツとした。

アベックで楽しそうに選んでいる姿も見れた。

レジに真帆がいた。

ラッキーな事に、側には他の店員が居ない様だった。

初めて店で彼女に会った時には、ぽっちゃり小太りだったのに、激痩せした感じで、ものすごく心が痛んだ。

意を決して、彼女の方に向かって歩いていった。

「あの・・・」

「はい」

営業スマイルで俺を見た彼女は、見る見る笑顔が消え恐怖の様な表情に変わった。

だがすぐに気を取り直した感じで、引きつった笑顔を見せて、懸命に返事をした。

「何でしょうか？」

「大切にしていたペンダントのチェーンがちぎれちゃって、直したんですけど、何を買ったらいいのかな？」

彼女はレジにセキュリティロックをかけてから、持ち場を離れた。

「見せていただいてもいいでしょうか？」

俺はペンダントを彼女に渡した。

「お願いします」

彼女はペンダントを真剣に見てから、店舗用の買い物トレーにチェーンや、接続パーツなど選んでいった。

「これ一式で直せると思います」

俺は周りをキョロキョロと見て、人が居ないのを確認してから、小声で真帆に言った。

「ごめん。俺が悪かった。ゆっくり話しをしたいんだけど・・・」

「何を言ってるんですか！ もう、話す事は何もありませんから・・・」

「.

「お願い一度だけ．．．」

物凄く困った顔をしたが、観念した表情をして、

「分かりました。お店が18時30分に閉店して、店内の仕事を終らせて、19時45分頃には出れると思いますから、そのぐらいにお店の前に居てください」

「ありがとう」

俺がそう言ったら、困惑したような、驚きの表情をした。

「じゃあ後で．．．」

俺はレジに行つて会計を済ましてから、彼女に一声かけて店を出た．．．

彼女は物凄く困惑した表情で、嫌がっているようにも見えた。

* * * * *

19時頃から俺はシャッターの降りた店の前にずっと立っていた。彼女とすれ違わないように．．．。見失わないように．．．。逃げられないように．．．。不安な気持ちでいっぱいだった。

19時30分に真帆が店の前にやってきて、ホッと胸をなで下ろした。

「来てくれて、ありがとう．．．。近くのファミレスに行かない？」

真帆は無言でコックリうなづいた。

ファミレスに入って、向かい合わせに座った。
真帆の顔はさっきから曇ったままだ。

「何か食べる？」

真帆は相変わらず無言状態で、首を横に振る。

真帆が何も要らないと言うので、飲み物を二つ注文した。

少し沈黙が続いてから真帆は、やっと口を開いた。

「あの・・・何の用なんでしょうか？」

「俺、真帆さんに謝りに来たんだ」

「えっ？」

「本当にゴメン」

「どう言う事でしょうか？」

「ホストみたいな仕事していると、どうしてもストーカーのような事をする客が多くて、真帆さんとの出会いが、あまりにもタイミングの良すぎる偶然の条件が重なったから、だんだん不安になって来て、あんたの事疑ってしまったんだ」

「私の事ストーカーだと思ったって事ですか？」

「ゴメン」

「あの時言った事は本心じゃなくて、わざと嫌われるような事を仕

向けたんだ。

付き合おうって言った事は、本心だったんだ。

真帆さんが居なくなってから、とんでもない事をしてしまった事に気がついて謝りたかったし、出来るならやり直したいって思って・

「・

「一度だけコンサートにご一緒しただけですし、特につき合いが会ったわけじゃありませんから、やり直さなくてもいいですよ。それにもう、霧夜さんの事、恨んだり、怒ってませんから気にしないでください」

「俺、あんたの事 好きなんだ」

その一言で真帆の目が点になった。

とっても意外な発言だったみたいで、大きな目が更に大きくなって、しばらく固まっていた。

「私の事、からかって楽しんでるんですか？」

「真面目な気持ち、居なくなってから大切さが分かったっていうか・
・。身勝手なのは十分分かってる」

「いい加減にしてください」

「俺、あんたが側に居ないと何か淋しいんだよ」

『淋しい』という言葉を聞いて、真帆が物凄く反応した。

真帆もきつと淋しい子なんだ・。。

「どうかしてますよ。私みたいな年増のおばさんの事なんかサッサ

と忘れて下さい。それに、もう信じられませんか。恐くて信じる事が出来ません」

「そうだよ。物凄く酷い事しちゃったし。だけど、諦め切れないんだ。

あんたがいらないとイライラして気持ちがモヤモヤして・・・。
心が満たされないうつていうか・・・。心に穴が開いてしまったって
いうか・・・。」

「何で、何でなんですか？ こんなパツとしない中年のおばさんの
何処がいいって言うんですか？霧夜さんおかしいですよ」

「俺もわかんないけど、初めて会った時からあんたの事が気になっ
て、どうにもならないんだよ」

困惑して困った顔の真帆・・・。

「俺、あんたを失ったらおかしくなるかも・・・。気が狂うかもし
れない・・・。」

困り果てた顔の真帆。

「霧夜さん勝手ですよ。どうしてそんなに私を振り回して困らせる
んですか？ やっと少しづつ気持ちの整理が出来始めた所だったの
に・・・。」

そう言つて真帆は、大粒の涙をボロボロこぼし出した。

「俺、もう二度とあんたを裏切らないから・・・。又やり直そうよ」

真帆は顔を伏せたまま、ボロボロ真珠のような粒が落ち続けた。

「俺さ、友達じゃなくて、恋人になって欲しいっつーか、そう言う意味で付き合っただけなんだ」

「そんな事言われたって・・・」

「俺の事嫌いか？」

「うん。嫌いです。大嫌い！」

ガツクリ落ち込む霧夜・・・。

「だけど好き・・・」

俯きながら、聞こえるか聞こえないかぐらいの声で、ポツリと言った。

その一言で、俺は地獄から天国に登りつめた。

「じゃあ付き合ってくれよ」

「分かんない」

何度も、何度も、俺は『つきあってよ』と言って、真帆は『分かんない』『できません』と言い続けたが、最後に観念したように、首を縦に振った。

「やった!！」

「また傷つけるような事したら、私、生きてられないです」

「俺、絶対裏切らないから」

「信じられない」

「無理に信じてくれなくてもいいから、でも、裏切らないよ。俺」

* * * * *

ファミレスを出て、俺と真帆は隅田川沿いを歩いた。

俺は、手を伸ばして、真帆の手を繋いだ。

真帆は驚いた顔をして俯いた。

「あつたかい．．．」

「え？」

「人の手って温かいね。体温が心に伝わって、心が温まる感じがする」

二人無言のまま暫く川沿いの遊歩道を歩いた。
突然真帆は立ち止まった。

「霧夜さん、私やっぱり付き合えない」

「え？　なんでだよ」

「だって私、貴方が思ってる様な人じゃないと思うの」

「どつ言つ事」

「自信が無いし、私、汚れてるし．．．。きっと貴方に相応しい女

性じゃないと思うし、きっと嫌いになると思うから・・・」

（3話に続く）

第3話 真帆の生い立ち

真帆から自分は汚れてて付き合えないと言われて困惑する霧夜。

「いったいどう言う事？」

「そのベンチに座りませんか？」

二人は側にあつたベンチに腰かけて、隅田川を見た。川の向こう岸の街明かりが華やかに光つてる。

真帆は、自分の生い立ちの事を話し始めた。

真帆の両親は見合い結婚で、母親は上流とまではいかなかったが、裕福な中流家庭の家の娘で、働いた経験はなく、短大卒業後は、花嫁修業の様な感じで色々習い事に興じていたらしい……。父親は、銀行員一家で、エリート意識の高い家系だったらしい。

両親に甘やかされて育った母親は、家事はあまり得意ではなく専業主婦の割に、家事が苦手で、家の中は乱雑としていて、父親の怒りをいつも買っていて、気の強い母親は、素直に受け止めずに口答えばかりして、いつも口喧嘩が絶えなかった。

そして、愛情のない結婚生活にストレスを溜め込んだ母親は、そのストレスの捌け口に真帆を叩いたり、わざと心を傷つける言葉を浴びせ続け、精神的、肉体的虐待を始めるようになる。

真帆には4歳年上の兄がいたが、逆に母親は、兄に対しては溺愛して、異様なくらいに可愛がった。

兄弟喧嘩をすればいつも叱られるのは真帆で、やがて兄からも小馬鹿にされたり、見下されたり、時には叩かれたり、わざといじめられるようになっていった。

真帆の話を聞いて、驚く霧夜。

「随分と辛い目にあってきたんだね」

「こんな事だけじゃないの．．．」
意を決した様に、真帆が話し始めた。

「今まで分からない事があって．．．。ただの思い過ごし？考えすぎ？ ずっと気持ちがスッキリしなかった事があったのだけど、最近パソコンを買って、インターネットするようになって、調べてみてやっと分かったって言うか．．．」

「なんだよ、それ」

真帆は話し始めた。

真帆の父親は、幼い頃、遊園地や公園に連れて行ってくれたり、夏のお祭りにも連れて行ってくれて、色々買ってくれたりとても可愛がってくれたそうだ。

「いい親父じゃないか」

「でもね．．．」

真帆が小学校2年生の時、居間の畳みに寝ころんで本を読んでいるうちに、うたた寝を始めた真帆の横にゴロンと父親も寝ころんで、一緒に昼寝をした。

穏やかな家族団欒の光景．．．。
だけど、違和感を感じた。

初め、真帆の髪の毛を優しくなでていた父親の手が、だんだん下がつてきて、執拗に真帆の体を撫で回し、それからその手はだんだん下の方に降りてきて、急に下着の中に手が滑り込んできた。

驚いた真帆は、パツと飛び起きて、トイレに行くふりをして父親から離れた。

その事に気がついてから、父親が大嫌いになった。

父親が接近してくると、サツと離れて、防御するようにした。時々風呂に入っていると、一緒に入って来ようとしたが嫌がつて追い出したり、年頃になると、間違つてドアを開けたふりをして父親は何度も体を見てきたりして、その度に怒つた。

「そのせいか、あまり幼い頃の記憶がなくて．．．。実際何があつたのかも記憶が定かでは無いし．．．。多分それ以上の事はなかつたと思うし、そうであつて欲しいと思つてるのだけど．．．。」

あれは虐待だつたのか？ 思い過ぎしの過剰防衛だつたのか？
ずっとあやふやな気持ちのまま、悶々とした気持ちで引きずつてきたけれど、ネットで調べたら、同じような事が沢山書き込まれて、例え性交がなかつたとしても、このような事は性的虐待であるつて書かれてて．．．。

やっぱりつて気持ちと、信じたくなかつたけれどそうだつたんだと言つガツカリした気持ちと、悲しみと．．．。
心が張り裂けそうになつてしまつたの。

だからね、私は汚れてるのよ。

実の父親からそんな事されて．．．。そう言つ目で見られて．．．。消えて無くなつてしまいたくなつたわ」

「真帆は全然汚れてないし、綺麗だから、そんな事思っなよ。真帆がそんな事言ったら、俺はどうなるんだよ」

「え？」

「俺は店のトップを取る為と、金の為に、何人もの女性と寝たし．．．。それを思うと、俺の方が真帆に相応しくない男だよな」

「そんな事ないよ。霧夜君の事、汚いなんて思わないから安心して」
「うん」

真帆は又自分の話しを続けた。

真帆の母親は、そんな父親の異常な行動に気がつき、言葉には現さなかったが、真帆が綺麗になっていくのを嫌い、かわいい服装を一切させてくれなかったし、買って貰えなかったし、痩せると太るように色々食べさせられた。

真帆には七五三、成人式．．．。そう言った写真が一切ない。着物を買って貰えなかったし、小学校の入学式の時でも、可愛い服を買って貰えず、くすんだ色合いの地味な服だった。

髪の毛を二つ編みにしたり、友達から貰ったかわいいヘアゴムをしただけで、『いやらしい』『汚れてる』『ふしだらな子』など、あらゆる言葉で攻撃された。

その言葉以外にも『馬鹿だ』『ダメな子だ』『価値のない人間だ』など、人格否定するような言葉を言われ続け、だんだん自分はそんな人なんだと思う様になって来た。

やる気と気力をそぎ取られ、自分は人よりも劣る人間、駄目な人間

。。。
だから何をやっても、どうせ出来ない。。。そんな風に思い込んで来た。

「酷いでしょ？ それよりもつと酷い言葉も言われたのよ。『あんたなんか生まれてこなければ良かったんだ』って。。。その時は、じゃあ勝手に私の事、生まないでよ！！って思ったわ」

真帆の兄が大学を卒業。。。真帆が高校を卒業して、オーデイオ機器メーカーの工場に就職すると同時に、両親は離婚した。

それからは、真帆が母親の面倒を見てきた。

真帆の通帳は母親にとりあげられ、その母から、月2万円だけしか貰えなかった。

働いても、働いても、貰えるお金は月2万円。。。仕事に忙しくて痩せると、カロリーの高い物を食べさせられて、太らなくてはいけない。。。恋愛も出来ない。。。お友達と出かけたり、旅行も出来ない。。。

「何で逃げ出さなかったのさ。」

「マインドコントロールって知ってる？」

「洗脳される事？」

「私ね、ずっと幼い頃から母親から思い通りになるように仕向けられて、育てられたから。。。」

その母の呪縛から逃れられなくて、どうしても見捨てられなかった。

。。。

何と言っても血の繋がった実の母だし。。。それに、ずっとその環境で育つとそれが当り前のように思えて来て、あまり疑問に思えなくなってしまうの。

コントロールされてるって分かっていても、気付けば母親の思い通りの行動をとってる。。。。

幼い頃から、電話の内容も全部チェックされてたし、友達から貰った手紙も読まれてたし。。。机の中もノートも全部見られてたし。。。プライベートも無かったし。。。。

親しい友達が出来たって、『その子はあなたに相応しくない良くない子だから、付き合うな!』って言われて、親友も作れなかったし。家にも呼べなかったし。

ましてや恋人なんて絶対に出来ない状況だったし。。。。

薄々感じてたの。。。。

私が母親の呪縛から解かれるのは、母親がいなくなった時だって。。。。

だから心の中でずっとその日を願ってたの。。。死んで欲しいとか、そんな恐ろしい事までは考えなかったけれど、開放されたいといつも願ってた。

病気知らずで健康な母だったから、自由になれるのは、きっと60歳ぐらいになってからかも。。。って替えていたわ。

でも、どうにもならないし。。。パラサイト母だよね。

60歳になってからでも良いから、自由になれるいつかそんな日が来るって、その事を希望のように思って、それを心の糧に、必死に食い縛って頑張ってきたわ」

「だから店に来た時、自由になったお祝いって言ったんだね」

「勿論母が亡くなった時には、悲しいと言う感情もあつたけど．．．
。悲しいよりも『ああ、やっと』と言う気持ちの方が正直強かつたの。
あの時、何て酷い事を言ってるのだらうとも思つたけれど、それで
もやっと．．．って本音が口に出てしまったの」

真帆は話しを続けた．．．。

「母が亡くなってから、兄とまたひと揉めあつて．．．」
母親の面倒を真帆に全て押し付けて、自分は結婚して家庭を築き、
母親が亡くなった途端に、遺産相続放棄の書類を持って来て判を押
す様に真帆に迫つた。

「もう兄と争うのも、関わるのも嫌だつたから、すぐに判を押し
たわ。自由さえ手に入れば、何も要らないって思つたから．．．」

真帆が持つて出たのは、僅かな自分の衣類とささやかな私物．．．。
それから母親から取り上げられていた、自分名義の通帳とカード．
。

「通帳を開いたら、残金3千円だつたの．．．」

「それでどうやって生活出来たんだ？」

「神は私を見放さなかつたのよ」

「え？」

「3千円の貯金なんて要らないし、解約しようと思つて、銀行の解
約窓口に行ったの．．．。
そうしたら、銀行員の人からものすごく引き止められて．．．。

よくよく見たら、残高3千円の日付って10年前の日付で．．．。それからずっと、通帳は記帳されてなくて．．．。

結婚して家庭を持った兄は、お嫁さん寄りの考えに変わって、母の言う事は全く聞かなくなつて、物凄く仲が悪くなつてしまつて、母は兄に対して猜疑心が高まつてしまつて．．．。

自分の財産を奪われないように、私の口座を隠し財産口座に使つていたみたい．．．。

で、記帳し直したら、億近い金額が入つてたの．．．。

その事は勿論兄は未だに知らないし、私名義だから遺産相続放棄しても、私の物だし．．．。

兄が相続した私と母が住んでいた家は、かなり古い物だったし、何故か抵当に入つてて、殆ど残らなかつたみたい．．．。」

「何かその話を聞いてホツとするよ．．．。」

「それから、母の葬儀も済んで、実家を出て、何処に住もうかなと思つた時、私には今まで縁のなかつた場所に住みたいって思つたの．．．。

華やかで洗練されてて活気のある所．．．。

何となく頭に『六本木』の地名が浮かんできて、ここだつて思つて、駅近くの不動産屋さんのオススメマンションに決めたら、霧夜さんと同じマンションだったの」

「もしかしてさ。丸善不動産？」

「え？そうだけど、知ってるの？」

「俺もそこでオススメだったマンションを選んだんだ」

「もしかして、徳山さんって言う50代ぐらいの人が担当だった？」

「ゲゲゲツ．．．。その人だよ．．．」

「体格が物凄く良くて、ちょっと頭が．．．な人？」

「そうそう、凄く太ってて、頭がバーコード．．．」

「気を使って、言わないようにしたのに、霧夜くん、きつい！！」

お互い目を見合わせて、笑う。

笑い合って、一呼吸置いてから、真帆が言った。

「なーんだ。だから同じマンションだったのね」

「そうだったんか．．．。本当にゴメンな。酷い事して．．．」

「もういいから、気にしないで．．．。あの時の言葉は本心じゃなかったって聞いて、心が救われたから」

「六本木に住んでから、夜、時々華やかな男性の人達とすれ違って、気になってたの．．．。

どんな仕事してる人かな？芸能人かな？あれこれ想像して．．．。それから暫くして、その人達がホストだって知って、物凄く興味があつて、ドキドキしながら行ったお店が『club ピュア』だったの。

まるで、映画から抜け出たような綺麗な男の人達ばかりで、驚いたわ。

その中でも霧夜くんはずば抜けて素敵だったわ」

「嬉しいな．．．でも何で、一度しか来てくれなかったの？」

「私恐がりだし、深入りすると恐ろしい所のような感じがして．．．それに私には似合わない場所だなって思って．．．」

私の居場所はここにはないなって思ったの．．．。あそこには、若くて綺麗な女性とか、お金持ちで仕事のバリバリ出来るキャリアウーマンとか、お金持ちのセレブなご婦人とか．．．。私の居場所じゃなかったから．．．」

「確かに純情な真帆には似あわないかもな。一見華やかに見えても、裏では汚れた部分もあるし．．．。そんな事考えると、俺、真帆に相応しくない男かもしれないな、うす汚れてるし」

「そんな事は思わないで。私の事思って貰えてとても嬉しいの。感謝の気持ちでいっぱいになぐらい．．．」

「俺、めちゃくちゃ感激してる．．．」

「でも、本当に未だに分からないの。何でこんな何も取り柄の無い私のような、年増のおばさんの事を好きなのか？」

「それを言うなよ．．．。あんた自分の魅力に全然気がついてないけどさ、初めて見た時綺麗な宝石の原石だって思ったんだ。磨けば輝く宝石．．．」

自分の魅力に気がついてなくて、謙虚な所もまた魅力なんだけどさ．．．。あんた物凄く綺麗だよ。

それに俺好きになったら年とか全然気になんねえし．．．」

「本当に良いの？」

「全然オツケー」

「私と年が一回りぐらい違わない？」

「真帆って33歳？」

「ええ」

「俺さ何歳に見える？」

「23歳？」

「実はさ26歳。7歳ぐらい大した事無いでしょ」

「ちょっとホツとしたけど……。でもやっぱり年の差カップルだよね。

でも、霧夜くんが気にしないんなら、私も気にしない事にする」

「そうだよ。細かい事は気にしない事にしようぜ」

「うん」

二人で暫く寄り添って、無言でベンチに腰かけてた。

「ちょっと寒くなってきたね」

「そうだな。俺、腹減ってきた」

「家に来る？」

「いいのか？」

「ご飯作るつか？」

「嬉しいな」

真帆のマンションに向う途中スーパーに寄って、あれこれ晩ご飯の食材を買う。

なんだか新婚夫婦みたいで、楽しい気持ち……。

真帆の住んでるマンションは、浅草橋駅から歩いてすぐの所にあった。

1LDKの新築マンション1階で、綺麗な所だった。

「これで家賃いくら？」

「14万5千円……。この辺だと安くて良い物件だと思って選んだの」

部屋は真帆の気帳面さが伝わってくる感じで、物凄く綺麗に整然としていた。

「何か良い匂いがする。」

「これかな？」

コンセントの所に何やら陶器の小さなランプのような物がさしてあった。

そのランプの上の方には窪みがあって、水のような物が入ってる。

「これなに？」

「アロマランプ。この窪みに好きなオイルをたらして、そのオイルがランプの熱で温められて、香りが広がるの。この香りはラベンダーよ」

「へえ、これいいね」

「すぐに作るから、テレビでも見て待つてね」

「ねえ、部屋見せてもらっても良い？」

「ちよつと恥ずかしいけど、どうぞ」

1LDKの部屋は、小さな白いシューズクローゼットの付いた1・75畳の玄関に、3畳のカウンターキッチンに、6畳のリビングダイニング、クローゼット付の7畳洋間に、1・5畳の脱衣室に、1・75畳ぐらいのバスルームと、0・75畳ぐらいのトイレ……。何よりも新築で綺麗で過ごしやすそうだ。

家具は白木のナチュラルな感じで揃えられて、カーテンは女性らしい淡いピンク系の小花柄だ。

照明器具は、アンティークで優雅なデザインの物……。観葉植物や、オシャレな器に寄せ植えたミニサボテンも並んで、ミニブリキのバケツや、子グマの人形や、可愛いピックが刺さってる。

ダイニングテーブルの上にはトレイに入った、作りかけの、ビーズアクセサリーが置かれていた。

真帆が楽しそうに、アクセサリーを作っている姿が浮かんできた。

長年家事をやってきた感じで、あっという間に沢山の料理が出来上がった。

「短時間にすごいね」

「圧力鍋を使うと短時間で作れるのよ」

「そうだ、これ返す。本当にゴメン」

そう言っただけは、真帆が返した100万円入りの封筒をテーブルに置いた。

「え．．．でも．．．」

「本当に俺セコイって言うか．．．。嫌になっちゃうよ。あの時、嫌われるようにわざとあんな事を言ったんだ。十分反省してるし、受け取れないから．．．」

「私も謝らなくてはいけないの。霧夜クンに買って貰った物、全部捨てちゃったの。ごめんなさいね」

「そんな事いいよ。俺が悪かったんだし．．．。これは受け取ってね」

「本当に、いいのかしら．．．」

「うん。是非．．．」

「じゃあ、分かりました」

「なあ、随分細くなっちゃったけど、あまり食事取ってないんじゃないか？」

「正直言うと、暫く食事が食べれなくなっちゃって．．．でもね、心配事が消えたからもう大丈夫。食べれそうな気がする」

「沢山食べるよ。俺、ぼっちゃりしたあんた可愛いつて思うよ。だから、気にしないで沢山食べるよ」

「うん」

真帆の作る食事は、母親の優しさが溢れるような、体にも良さそうな、お総菜風の和物が多かった。

「凄く美味しいや。こんな家庭料理食べるの、かなり久し振りで感激だな」

「気に入って貰えて良かった。沢山食べてね」

「うん。どんどん飯が進むな」

ふと俺は、ある事が浮かんだ．．．。

「今気がついたけどさ、あんた、俺のお袋に秀囲気が似てるんだ．．．。もうかなり前に死んじゃったんだけどさ。俺の事聞いてくれる？」

「うん。あなたの事しりたいな．．．」

(4 話に続く)

第4話 霧夜の生い立ち

霧夜は一瞬目を伏せて『何から話そうか?』心の中で整理してから、真帆を真直ぐ見据えて話し始めた。

「霧夜はさ、源氏名でさ」

「源氏名?」

「そう。本当の名前じゃなくて、店で使う名前の事・・・」

「えーっ。そうなの? てっきり本名だと思ってた」

「真帆の事だから、そうだと思ったよ・・・。霧夜なんてモロお水つばい名前じゃん」

霧夜は、クスツと笑った。

「俺の本当の名前は 久世 純哉」
そう言つて、自分の免許証を見せた。

「えっ? この写真、別人みたい。 純哉さん・・・素敵な名前ね」
「・・・」

「この写真は24歳の時だけど、悪ぶつてたから人相悪いつしょ」

「でも凄いな、ゴールド免許じゃない?!」

「すごいっしょ。飛ばしそうに見えるかもしれないけど、結構慎重なんだよね。」

でさ、俺、中2から施設で育つたんだ」

霧夜元い、純哉の話しでは、家は東京郊外の駅前近くで両親が花屋さんを営んでいた。

夫婦仲良く、小さなお店だったが、店舗が駅前と言う事もあって、まあまあ繁盛していた。

その幸せが崩れ始めたのは、純哉が小学校5年生の時だった。

真面目実直だった父親が、店に良く来る水商売風の女性に心奪われてしまい、やがてその女性と一緒に家を出て行ってしまった。その後、両親は離婚……。

それでも母親が一人で店を切り盛りして、何とか生計を立てていた。

「親父の奴、人を見る目がないって言うか、大ばか野郎って感じでさ、俺のお袋は、すげえ綺麗だったし、優しく働きの者で……」
そうやって、純哉は母親の写真を黒のブランド物のレザー財布から出して、真帆に見せた。

「すごく綺麗……。純哉さんってお母さん似なのね……。面影がそっくり……」

「優しいお袋がいたから、親父がいなくてもそんなに寂しい思いしなかったし……。

でもさ、中1の時にお袋が体調崩して、病院に行ったら末期の子宮癌だって分かって……。

体調の異変に前々から気がついていたらしいけど、お袋、大分無理してたんだな……。

俺が中2になってすぐぐらいに亡くなってしまった……。

親父は何処にいるのかも分からないし、それからすぐ施設に預けら

れて．．．。18歳までそこにいたんだ」

それから純哉は、あれこれアルバイトして、やがて、ホストの世界に入り、今までずっとホストとして生きて来た。

新人の頃はトイレ掃除から、様々な雑用、売れっ子先輩に代わってひたすら飲みまくり、先輩のしでかした失敗のしりぬぐい．．．。厳しい罰金制で、遅刻すれば分単位で罰金が課金され、同伴デーは、同伴する客が見つからなければ罰金．．．。何だかんだと、給料から差し引かれ、過酷労働な割には月給数万円と言う事も多かったそうだ。

だが、数カ月でメキメキ頭角を現し、1年目にはナンバーツーまで登りつめ、2年目からずっとナンバーワンをキープしてきた．．．。最近では月収800万前後ぐらい貰える程にもなった。

その間色々危ない橋を渡ってきた．．．。

一番多いのは、ストーカー客．．．。

「ポスト荒らされるのは日常茶飯事って感じだからさ、俺、私書箱作って、自宅には郵便物届かない様にしてるんだ。」

朝、新聞取るうと思ったら、ポストの投入口を手で押し開けて、覗いている女もいてさ．．．。

投入口からガラガラした目がギョロって俺の事見てんの．．．。ゾクゾクしてたよ。

それから、ヤクザの親分の女がホスト遊びに狂って、俺に夢中になつてさ．．．。

殺されそうになった事もあつてさ．．．。

殺される前に、その親分、抗争でやられちゃったけど・・・。

これは、妄想で狂ってしまったストーカー女に刺された傷・・・
そう言つて、純哉は服をまくり上げてお腹を見せた。
そこには刺された傷跡が残っていた。

「まあ・・・」

その傷を見て、真帆は青くなった。

「そんな事もあつて、私の事ストーカーじゃないかって不安になつちやつたのね」

「ごめんな。こういう仕事していると女性に対して警戒心が強くなつてしまつて・・・」

「もう気にしないで。純哉君の事、良く分かったから」

「俺さ、もう一つ秘密があるんだ？」
「イタズラそつに笑う。」

「何だろう？ 気になるな」

「俺さ、もう少し稼いだらホストやめようと思つてるんだ。
でさ、お袋みたい在花屋やろうと思つてる。
俺みたいなのが花屋なんて変かな？」

「ううん。凄く素敵だと思う」

「そう？ 嬉しいな。でさ、フラワー装飾技能士検定1級持つてるの。意外だろ？」

俺さ、無茶苦茶視力悪くてコンタクト外して厚手の眼鏡すると瓶底

でさ、眼鏡するとまるで別人なんだ。だから、瓶底眼鏡して、フラワーコーディネートの資格取る為に学校に通ったり、こっそり花屋で働いたりしてたんだ。学校で男性って少ないから、瓶底眼鏡しても結構モテてさ、『瓶底くん』とか『純ちゃん』って呼ばれて、可愛がられてた。(笑)
1級の試験受けるには、実務経験2年が要るからね。実はもう、店舗用の土地も買ってあるんだ」

「凄いわね。そんな素晴らしい夢を持ってて、その夢を叶える準備を着々と進めてて・・・」

真帆が目をキラキラ輝かせて聞き入る。

「なあ、俺と一緒に店やらないか？」

「え？」

「あんた、ビーズとか、雑貨とか好きそうだし、花と雑貨の店なんてどうかな？」

「私か？ とても素敵で憧れるし、やってみたい気もするけれど・・・」

「じゃあ決まりだな」

「早いつ。即決すぎない？」

「あんたに逃げられないうちに、キープしておかないと。もう逃げらんねぜ。約束だぞ」

意地悪そうに笑う純哉。

まるでイタズラっこの少年みたいな顔だ。

「うん。分かった！ 私、協力する」

「色々夢があるんだ。店の端っこのカウンターでちよっとしたお茶出来る、カフェみたいなおスペースも作りたいし、フラワーアレンジメント教室なのも開いたりさ．．．。あんたはビーズ教室開いたり．．．」

「楽しそうね．．．」

「店の場所は成城なんだけどさ、今度一緒に土地見に行こうぜ」

「うん」

「俺、明日も休みなんだけど、真帆は仕事？」

「ううん。だけどミュージカル見に行くから、土地見る時間あるかしら？」

「また2枚買ったの？」

「ううん。実は3枚．．．」

「なんでー？」

目が真ん丸になって驚く純哉。

「前の方の席で見たかったのだけど、通路側が無かったから、真ん中3席．．．。」

もうやめようと思いながら、なんかすぐ近くに知らない人が座ると落ち着かなくなっって、ダメなのよね」

目を見合わせて、お互いに爆笑した。

「じゃあ俺も連れてってよ。その癖はいつか直るよ、気にすんな。直らなくても良いじゃん、俺、得するし・・・」

「純哉君から『いいじゃん、気にすんな』って言われると、とても気持ちが悪くわ。」

私の心が元気になる、サプリメントみたいだな・・・」

ご飯を食べ終って、二人でお喋りして、楽しい一時を過ごした。

「あら、もうこんな時間・・・」

「それじゃあ俺、そろそろ帰ろうかな・・・」

「うん」

「本音は泊まっていきたいけど、俺、好きな女は大事にしたいから帰るわ」

純哉のその言葉にドギマギして、真帆の頬がピンクに染まる。

「そ・そうだ、あのペンダント直しておきましょうか？」

「ああ、じゃあお願い。助かるよ。凄く気に入ってるんだ」

「でも何でこんな風になっちゃったのかしら？ かなりの力が加わらないと切れなそうだけど・・・」

「これさ、俺が引きちぎったの」

「何でまた・・・」

「真帆に会う口実作る為に・・・」

「えええっ」

「作戦成功だな」

「やる事が大胆なのね」

「でもさ、仲直り出来て良かった」

「私も良かった・・・。本当は会おうかどうしようかととても迷ったの・・・。もう一度だけって思って、会う事にして、良かった・・・」

「実は逃げられないか無茶苦茶心配だったんだ。本当に良かったよ」

「うん」

「玄関まででいいからさ、ちゃんと鍵かけるよ」

「うん」

「また明日な」

「うん」

ふわりとした優しい笑顔で手を降ってから、純哉は帰って行った。

純哉が出て行った後には、甘いけれどキリリとした芯があり、それでいて爽やかな、コロンの香りが微かにした。その香りは、ほんの一瞬でフワリと消えた。

純哉が帰った後、真帆は、ビーズクラフトの工具を出してきて、純哉のペンダントをサツと直した。

思いきり引きちぎる純哉の姿を想像したら、何となく可笑しくなつて、ついフツと笑ってしまった。

それから、色々な種類のビーズのパーツが入った、パーティースに入った専用カゴを出してきて、その中からビーズをあれこれ選んで、ビーズで編んだ、花カゴのストラップを作った。

淡いベージュのビーズで持ち手付きの籐カゴの形に編んで、中にはビーズで編んだ、色とりどりの小さな花を入れて……。とても可愛らしい物が出来た……。

* * * * *

翌朝、11時に純哉は家まで来てくれる事になっていた。

まだ9時少し回った所……。予定の時間よりもかなり早く、インターホンが鳴った。

扉を開けたら、純哉だった……。ちよつと血相変えたような慌てた雰囲気だ。

「あれ？ 約束の時間よりもかなり早くない？」

「携帯かけたのに、『この電話番号は、現在使われておりません』って案内が出たから、焦って来ちゃったよ」

「あ．．．。そうだった。かなり前に携帯解約しちゃったの」

「え？」

「あの時、全部処分しようって思って．．．。身辺整理って言うか．．．」

「凄い思い切りがいいな」

「私って、諦める事と、我慢する事を強要されて育ってきたから、諦めが早くてね」

「そうだったのか．．．」

よし、じゃあ後でお揃いの携帯買いに行こうぜ。お前直通専用携帯．．．」

「ええつ。もう携帯は懲り懲りなのに．．．」

「そう言わないで．．．。あの時のお詫びに、携帯プレゼントするからさ」

「うーん」

それから二人は携帯ショップに行き、純哉がプレゼントするからと今一番売れ筋の最新型スマートフォン携帯を購入した。

真帆はホワイト、純哉はブラック．．．。

「最近やっとPCのインターネットが使いこなせるようになってきた所なのに、今度は携帯で悩みそうだわ」

「今時携帯を持ってないなんてありえないし．．．。やっぱりスマートフォンでしょ」

「そのスマートフォンって．．．何なのか．．．」

「色々教えてやるからさ。音楽とか使えそうなアプリとか、色々俺がやってあげるから．．．」

「うん。ありがとう。」

あ、そうだ、ペンダント直したから．．．」

真帆がバッグの中から小さな巾着袋を取りだし、その中からシルバ―のトライバルペンダントを出した。

「ありがとう．．．。つけてくれる？」

「え？ 私がつけてあげるの？」

「うん。あそこに座ろう．．．」

純哉は近くにあった大きな噴水を指さした。

その周りには、アベックらしい人や、待ち合わせで待っている人などが腰かけている。

「男の人にこんな事してあげるなんて、初めてだから、恥ずかしいな．．．」

ペンダントを付ける時に、純哉のうなじとサラサラした髪の毛に手が降れて、真帆はドギマギした。

「照れてるの？」

少しイタズラっぽい顔をして、優しく微笑んで純哉はゆっくり顔を近づける。

あの甘くて芯のある爽やかなコロンの香りがフワリとした。
ビックリした真帆は、サツと顔を引いてかわした。

「逃げるなよお」

「もしかして、キスしようとした？」

「うん」

「こんな人が沢山いる所でだめだよー。ビックリした」

「ダメ？」

「うん」

「じゃあ人のいない所ならいい？」

「うーん。わからない・・・」

「真帆って本当に可愛いなー」

年齢的には真帆の方が全然年上なのに、こう言う時はどっちが年上なのか分からない感じだ。

さすが店ナンバーワンだけあって、女性の扱いが上手い。

「そ・そ・そうだ・・・。これあげる」

もう完璧に動揺して吃り状態の真帆が、さっきの巾着袋から、ビーズで編んだ花カゴのストラップを出した。

「これ、真帆が作ったの？」

「うん。将来フラワーショップの店長になる純哉君にプレゼント」

「かわいい。」

目がキラキラ輝いて喜ぶ純哉・・・。

そんな姿が、まるで美しい絵を見ているような、とても綺麗でついうっとりしそうだった・・・。

周りの女性もそんな素敵で純哉の事をうっとりとしている感じがした。

「そんなに喜んでくれて、嬉しいわ。感激しちゃった」

「本当にめちゃくちゃ嬉しいよ」

そう言っつて、抱きついてきて頬にキスされた。

一瞬の出来事に、心臓は張り裂けそうに固まる真帆。

「将来のフラワーショップ店長の奥さんに、感謝のキス!!」

無邪気にサラッと、ドッキリ発言する純哉・・・。

「お・奥さん？」

「うん、そう」

(5話に続く)

第5話 結婚のボトルキープ

「奥さんって、あなたの？」

真帆は完全に頭の中がパニックになってしまっ、金魚のように口をパクパクさせて、あたふたした。

「決まってるじゃん」

「それってプロポーズってこと？」

「こんなシチュエーションでプロポーズって言うのもありえない感じだから、一応予約ってところ？」

「よ・よ・予約？」

「うん。真帆ってさ、恋愛に関して疎そっだし、結婚しないと同棲はありえないーってタイプな感じだし。。。俺、早く真帆と一緒に住みたいし。。。店やめたら即結婚したいし。。。ガード固くて、なかなかキスさせてくれないし。。。そんな風に見えないかもしれないけど、俺、あんたにメチャクチャ惚れてんの。。。。

真帆のスピードに合わせてたら物凄く時間がかかりそうだし、交際期間ワープして、スピード結婚しようぜ。。。。」

悪びれもせず、アツサリと爆弾発言を投げ掛ける純哉。

「そ。。。そ。。。そんな、まだ一緒に出かけるのって2度目だよ」

「いいじゃん、デートの回数とか、交際期間とか、そんなの無視して、直感を信じてさ。。。。」

「物凄い大胆な発想ね・・・」

「うん」

「あなたみたいいな素敵な人、世の中の女性が皆放っておかないし、私とスピード結婚してきつと後悔するわよ。私なんかよりも、もっともつと素敵な女性が、この先きつと沢山現れると思うし・・・。純哉君、どうかしてると思うよ。自棄を起こしてはダメだよー」

「いや。俺は到って真面目なんだけど・・・。まあ、いいや・・・。スピード結婚考えておいてね」

「う・う・うん。」
いきなりなんて事を言い出すのかと、真帆の頭の中は真っ白に近い状態だ。

「ううん？って言ったの？ まさか他に好きな男がいるとか・・・」

純哉に悩まし気な、深い瞳でジッと見つめられると、真帆の心臓は破裂しそうにどきまぎしてしまう・・・。

「ち・ち・違うって、『うん』って言ったよお・・・」
慌てて釈明する。

「じゃあ『OK』って事？」

「じゃなくて、考えますって事」

「そんなに考えないと答えが出ないの？」

ちよっと淋しげな恨めしそうな目で、真帆を見つめる純哉。

そんな目で見つめないでえーと思いつながら、真帆は一生懸命・・・。
「そうじゃないけど、私にとっては物凄くおいしい話って言うか、
宝くじに当たったって感じたと思うけど、純哉君側に立って考えた
ら、欠陥住宅を高額で買う様な物よ・・・。清廉実直な不動産やさ
んは、お客様に欠陥住宅は売らないし・・・。」

「あんだ、いつから不動産屋さん？（笑） 美味しい話思って思
ってるんなら、飛びつかなくちゃ」

「損しても知らないよ」

私と結婚したらきつと損するよお・・・私と結婚だなんてありえな
いし、信じられない。

「絶対そんな事ないって自信あるから・・・。思い切って俺の胸に
飛び込んでこいよ」

「・・・・・・・・」

まるで言葉巧みなセールスマンに羽交い締めにされたような気分の
真帆・・・。

もうなにも言葉は出て来ない・・・。

「あれ？ 返事は？ イエス？ ノー??」

「・・・・・・・・」

「10秒以内に答えないと、時限爆弾が爆発するよ。10・9・8・
7・6・5・4・3」

時限爆弾が爆発するなんて事ありえないが、もう頭がパニックってい

る真帆は必死状態・・・。

「イ・イエス」

その途端に純哉は大喜びして飛び上がった。

「やったぜ。もう変更はなしだよ」

啞然呆然とする真帆。

「あれ？返事は」

「分かりました。私、あなたと結婚する」

こうなったら腹をくくろうと決心する真帆。

「やったぜー！！」

人の多い場所で、大きな声でバンザイをして無邪気に喜ぶ純哉・・・。

周りの人は何事だろうと一斉にこっちを見た。

「じ・純哉君・・・。皆が見てるって」

「いいじゃんそんな事」

真帆は慌てて純哉の手を引っ張って、その場を離れた。

その途中、区役所があり、今度は純哉が真帆の手を引っ張って、中に入ってしまった。

「すみません。婚姻届用紙下さい」

このバイタリティーあふれる純哉の行動力と決断力に、真帆は驚きまくっていた。

おっとり型の真帆には、とてもついて行けない即決力だ．．．。
ただただ、啞然、呆然としていた。

「今度一緒に書こうぜ。戸籍謄本を準備しておくんだぞ。
保証人も2人いるな。店の後輩でいいか？」

「うん」

意外としっかりしている．．．。

どっちが年上なのか？分らない感じだ。

「ねえ、でも結局プロポーズじゃないの？ これって？」

「まあ気にすんな」

「う・うん」

もしかして私．．．乗せられた？ いつの間にやら押し切られて、
頭がついていけない真帆．．．。

こんな若々しくて、天真爛漫で、可愛らしくて、非の打ち所のない
ような美青年から、結婚してくれなんて迫られたら、もう、婚期を
大分逃してしまっている、何の取り柄もない自分には願ってもない
事だ．．．。

ほんの数カ月前まで結婚も諦めていたのに．．．。

そればかりか、楽しみも、幸せも諦めていた。

ただ坦々と生きているだけだったように思える。

いつか必ず自由を手に出れると信じて、その日が来る事だけを生き
る糧にしていたのかもしれない．．．。

今は自由だ。

そして幸せが一杯溢れている．．．。

そんな自分が信じられないぐらいだ。

夢じゃないよね、夢ならどうか冷めなくて永遠にと思っばかりだ．．．
でもこれは夢じゃない．．．。

でも何で、私なんだろう？ 何故そんなに思ってくれるんだろう？

「ねえ．．．。何で私なの？」

「え？」

いきなりの質問に状況が飲み込めなくて、目が点になる純哉。

「何でそんなに私の事を思ってくれるのか？不思議でしょうがないの．．．。」

「俺も分かんないけど、俺にはあんたしか見えないんだよね。良
い所も、悪い所も、全部いいんだよね。」

それにさ、好きとか嫌いとか、愛には理由がないのかも．．．。魂
のフィーリングがマッチしたのかも．．．。」

真帆はショーウィンドに映る、自分と純哉をまじまじと見る。
背がスラッと高く、ファッション雑誌のモデルが抜け出たように
素敵で、カリスマ性があつて、世の女性がみんな振り返るような若
々しい美しい男性と、空気のような存在で目立たなくて、地味で、
何の特色もないおばさん．．．。

親子か？って程ではないにしろ、仲の良い姉弟？って感じにも見え
る．．．。

「こうやって並んで見ると、とってもアンバランスなカップルに見
えない？」

「アンバランスってさ、支点をずらすと良いバランスがとれるんだ

ぜ。

俺ら環境は違つたにせよ、心に大きな痛みを受けて育つてきたじゃん。お互いにその痛みを感じとる事が出来て、理解し合えて、そしていたわつてあげる事が出来るじゃん。

痛みを感じ取れない分からない人間だつて沢山いるしさ、俺達はお互いの心の傷をよく知つてて、自分の痛みの様に感じとる事が出来てさ……。

愛に飢えてて、心の淋しさもしつてる……。
そして愛する事、愛される事も不器用で……。

俺、分かるんだ。

愛に飢えたあなたの事、いっぱい愛してあげたいし、包んであげたいし、暖めてやりたいし……。
いっぱい幸せにしてやりたいんだよね。

そして俺の事もいっぱい愛して欲しいんだよね。

俺達、史上最高のお似合いのカップルだぜ」

「本当に純哉君つて凄いな。あなたの一言一言が私の勇気の源になるの。

あなたの言葉を聞く度に、私つて小っちゃいなあつて思えて来るわ。若さのエネルギーかな？ いつも恐れずに向つて行く感じっていうか……。チャレンジャーつて言うか……。」

「そうかい？ 二人でだつたらさ、きつと何でも乗り越えられるよ。一緒にさ頑張ろうぜい」

「うん」

「じゃあさ、ミュージカルは夕方6時30分開演だろ？」

「うん」

「成城に行つて、店舗用地 見に行こうぜ」

「うん」

* * * * *

・・・成城学園駅の近く、日当たりも良さそうな好立地の場所にその土地はあった・・・。

「店舗件住宅にしようと思ってるんだ・・・。どんな建物にしようか大体は考えてるんだけどさ、まだまだアイデア募集中だから、協力してよ」

「駅にも近いし、店舗にも、住むのにも良さそうな環境ね・・・」

「だろ・・・。気に入った？」

「うん。純哉君は凄いわ、若いのに色々な事を考えてて、実現する為に頑張つて努力して・・・」

「ホスト始めた頃は何も考えてなかった、ただ金が欲しくて安易な発想で始めたけどさ・・・」。

結構キツイし、社会的にも低く見られてるし、ずっと続けるような仕事じゃないなって思うし、体も持たないし・・・。

でもさ、キツイ分、色々学んだし、悪い事もしたし、色々経験した

し。。。遊んだし。。。そう言う点ではもう満足なんだ。
もう馬鹿やってるのも、そろそろ終りにしようと思ってる。

俺、絶対にホスト遊びに狂う女とは一緒にならないぞって思ったんだ。

やっぱ、結婚相手は堅気の女性が良いし、だけどそう言う女性は、殆どホストなんてゴメン！って思ってるし。。。。

真帆のような、飾り気のない、地味で自然体で、ホストに偏見を持つてない女性が見つかって良かったぜ。

それにあんた、心根は優しく、我慢強くて、芯はしっかりしてて。。。。

モロ理想的な彼女なんだ。。。。

「なんだかむず痒くて、どうしていいか分からなくなるわ」

「そう言う謙虚で控えめな所もいいしさ」

「うーん。そんな事言われると。。。。」

「やりにくい？ でもさ、人は時と共に変化していく物だって事も分かってるし、将来図々しい肝っ玉母ちゃんになっても、俺、真帆の事、嫌いにならないから。。。。
お互いにこの先変わって行く姿も、楽しもうぜ」

「うん。あなたって本当に大人だわ。。。私の方が精神年齢低い感じがする。。。。

純哉君じゃなくて、純哉さんって呼んだほうが合ってるわ」

「純哉でいいよ」

「じゃあ、純哉」

「なんだい」

「あなたって素敵！　ありがとうって言いたいな」

「じゃあ俺も、真帆に感謝・・・」

お互いに柔らかな優しく愛おしい目で見つめ合った。

「それからさ、真帆にひとつお願いがあるんだけど・・・」

「え？　なに？」

「ホストやっている間は、アフターとか、同伴とかあってさ、依頼されれば客と待ち合わせして食事したり、店終わってから一緒に出かけたらしなきゃいけないくて、言ってみれば真帆意外の女性とデートしなくちゃいけない事になると思うんだ。

物凄く不快な事だと思っし、本当に申し訳ないと思ってるし、この事で真帆に迷惑かけると思うんだ。

今月中には店を辞めようと思ってるんだけど、その間だけ、堪えてくれるかな？　関係は絶対に持たないからさ」

「今月中だとあと2週間ぐらい？」

「うん」

「分かった。あなたの事信じてる。

私、お店には1度だけしか行った事ないし、まだあまりよく理解出来てない部分もあると思うけれど、それでも、そのぐらいの事は分ってる……。

ホストしているあなたと付き合うつて決めただから、その事については、了承っていうか、理解してあげたいって思ってるから……

「ありがとうな。」

いきなり今日辞めますって訳にもいかないし、俺の後に 影虎をと思ってるんだけど、引き継ぎの様な、養育しなきゃいけないし……

「分かった。私、そんなに執着心強くないから心配しなくて大丈夫よ。」

こんな私の事思っで貰えるだけでありがたいなって思っし……

「ごめんな」

「うん。分かったから……」

「でも、我が儘だけど執着してくんないのはちょっと淋しかったりして……」

「ごめんね。多分育った環境と性格かもしれないわね。今までもそうだったと思う……」

どんなに熱中しても、夢中になっても、大事に思っでいても、諦めなくてはいけない時がきたら、バサツと諦めるの。

そうしないと生きていけなかったし、自分を保っている事が出来なかったから……。

今まで沢山の事を諦めなくてはいけなかったから……。

それにね、執着と束縛は愛じゃないように思えるの。
心は自由だと思うし、私には永遠の愛ってあるのかどうか分からないな。

愛する人と最後まで添い遂げられたら、結果として二人の愛は永遠だったのかなって思うし．．．。
添い遂げられなかったら、残念な結果だけれど、永遠じゃなかったんだって思うし．．．。

どんなに努力しても駄目な時はダメで仕方ないのかもしれないって思うのよね」

「うん。ちょっと恐い発想だけど、真帆の生い立ち聞いたらなるほどなって思う。

俺の親父はとんでもない奴だったから、結婚したら絶対に最後までかみさん一筋って俺は信念持ってるんだ。だから、俺は死ぬまで裏切らない自信あるよ」

「うん。私も同じ気持ちだから．．．」

「うん」

* * * * *

．．．それから1週間が過ぎた．．．。

真帆は浅草橋の1LDKのマンションから、代々木の駅近くの2LDKのマンションに引っ越した。

純哉が店を辞めたら、一緒に住む予定だ。

浅草橋のビーズショップは、純哉のお店が具体的に実現化して、本格的に手伝う事になったら、辞めようと思ってるが、それまでは続けようと思ってる。

代々木からだったら、浅草橋のショップまで通勤時間 30分弱とまあまあ距離・・・。

純哉の方も、成城の店舗用地まで、30分少し・・・。

新宿と言う手もあったが、ホストクラブも多く、そう言った場所に出入りする、客だった女性と会う可能性も大・・・。

また、ホスト遊びをする女性の6割はホステスなどお水系の女性が多いので、そう言った店も多い新宿は避けたかった。

店を辞めたらしばらくは、純哉はそう言う場所からも遠ざかりたかったので、あえて代々木にした。

自分の後継者として、サブの影虎をと思っていたが、『アニキ』と純哉を物凄く慕っていた影虎は、一緒にやめてフラワーショップを手伝うと言い始めて、結局ナンバーツリーのライバルでもある 聖ひじりに後を頼む事にした。

ライバルと言っても、犬猿の仲と言うわけでもなく、どちらかと言うと和気あいあいとした感じの職場だったので、安心して任す事が出切る。

影虎の事が心配で、月末まで続ける事にしたが、これならすぐやめても良かったなと純哉は思った。

少し前までは、頑張ればそれに見合った給料と、毎月の売上ナンバースリーまでは、それぞれプラス手当てが出て、それがやりがいにつながって張り切っていたが、最近はそんな気持ちも失せてしまった。

真帆と夢に向って準備したり、一緒の時間を過ごす事の方が楽しく

て、自分にとって有意義な時間だ。
店を辞めるまで、あと一週間の我慢だ．．．。

無理矢理酒を飲まそうとしたり、我が儘を言ったり、ストーカーチックな事をしたりする、いわゆる業界用語で『痛客』^{いたきゃく}には、やめる事は告げずに、去つていこうと思っていたが、色々世話になった常連さんや、ごひいきの太客や、『エース』と呼ばれる太客でも上お得意客には、少しづつ辞める事を話していた。

ホスト最後の出勤日には、霧夜ファンのエース客主催で、『霧夜くん お別れ会』イベントが開かれる事になった。

『お別れ会』を開いてくれる人は、50代中盤ぐらいの女性会社経営者の 麻生 真紀子という女性だ。

純哉（霧夜）がホストを始めた、ナンバーワンに登りつめる前の、ヒラからの知り合いだから、おつき合いは長い。

数カ月で頭角を現し、トップに君臨出来たのも彼女の後押しがあった事が大きい。

実は彼女には生きていたら純哉（霧夜）と同じ年だった息子がいた。母一人、子一人の母子家庭．．．。

純哉（霧夜）と初めて出会った時の数ヶ月前に、息子を不慮の事故で亡くしてしまい、麻生夫人は、たまたま知り合いに誘われて、つき合いでこの店にやって来て、純哉（霧夜）と出会って、毎週店に来るようになった。

異性目当てのような気持ちでは無くて、純哉（霧夜）と数時間会話する事が楽しみでやって来ていた。

そんなお得意様なので、お店を始める計画や、真帆との結婚を考え

ている事なども打ち明けて、婚姻届の保証人になってくれる事にもなった。

大きく道を反れなかったのも、彼女が温かく見守ってきてくれた事も大きい。

「霧夜君とお店では会えなくなってしまふのは淋しいけれど、応援してるからね。今度はあなたのお店の方に、時々伺わせていただくわ」

「はい。お待ちしております」

「困った時には遠慮なく私に相談するのよ。
今だから言うけど、私、あなたに亡くなった息子の面影を見ていたのよね。

あなたと時々こうやってお喋りする事で、悲しみも癒えて、何とか乗り越えられる事が出来たのよ。

感謝しているわ」

「僕の方こそ沢山お世話になりました、本当に、感謝の気持ちでいっぱいです」

「今度、真帆ちゃんにも是非お会いしたいわ」

「はい。是非……。実は、店が終わったら、会う予定なんです。一緒にいかがですか？」

「お邪魔じゃないかしら？」

「そんな事ありませんから、麻生様の事は真帆にも話してるので・

「.

「じゃあちよつとだけね」

「はい」

最後のイベントは、大きなシャンパンタワーでみんな乾杯．．．。300万円もかかる大掛かりな物だったが、麻生夫人のご好意で、店員と客全員で盛大に乾杯した。

霧夜ファンの女性群は大泣きして引退を惜しんだが、一番心配していた痛客も来ず、何とか無事にイベント終了となった。

店が終つてから、麻生夫人と一緒に店を出る純哉（霧夜）。

「今日は本当にありがとうございました」

「私の方こそ、楽しかったわ．．．。一度シャンパンタワーをやってみたかったのよ」

「あ．．．。真帆」

店の前に薔薇の花束を抱えた真帆が立っていた。

「麻生様、この子が真帆です」

「まあ、可愛らしい方ね」

麻生夫人が優しい眼差しで、真帆を見る。

「真帆、この方がいつもお世話になっている麻生夫人だよ」

「どうも初めまして、いつも彼からお話しを伺っております」

「初めまして」

その時だった．．．。

物陰から派手な20代前半の女性が出てきた。

裏では痛客と呼ばれている、ストーカーに近いぐらいの霧夜ファン
の、真里香まじかだった．．．。

「霧夜．．．。店辞めちゃうの？ 何でえ？」

一波乱ありそうな不穏な空気が流れた．．．。

（第6話に続く）

第6話 痛客 真里香

「霧夜君、辞めちゃうの？ 何でえ。あなたに会いたい為に、ホステスまでして稼いでいたのに・・・」

「真里香・・・」

最後の日に、痛客 真里香と会うなんて・・・。
純哉（霧夜）は、彼女とだけは会いたくないと思っていた・・・。

「真里香さんでしたかしら？」

あなたがホステスをしようとしまいと、それはあなたの都合であつて、彼には関係ないでしょ。

霧夜君のファンだったのなら、気持ち良く新しい出発を祝って送り出してあげなさい」

麻生夫人が場の空気を察知して、助け船を出してくれた。

聞く耳持たぬと言った感じの真里香は、真帆の方を見た。

「この人は誰よ？」

「この子は私の姪っ子よ」

麻生夫人が機転を利かせ、そう言って、真帆の肩に手を置いてかばうように自分の方に引き寄せた。

「俺、今日で店やめたし、今日からホストじゃなくて、一般人なので・・・。悪いんだけど帰ってきてくれるかな？」

「そんなの酷いわ。あなたにいくら貢いだと思ってるの？」

「真里香さん、彼は無理意地して客にお金を出させる子じゃないし、

妙な言い係はやめなさい。

ホスト遊びは、嵌らない、本気にならないが鉄則……。彼はもうホストから足を洗ったんだから、帰りなさい」

「許せないわ。あなたの事本気だったのよ……。気を引こうと思っただけなのに……」

「でも、霧夜君は、他のお客さんと同じように接したでしょ？」

真里香はその場にしゃがみ込んで泣き始めた。

「俺さ、あなたの事、他のお客様と同じ目線で見てたし、勘違いするよ。態度はとった事ないし……」

逆に、何となくあなたが本気になりそうな予感がしたから、どちらかと言うと、一歩引いた感じで接していたつもりなだけ……。金も使い込ませないように、煽り（あおり）をした事もないし……」

「だから、物足りなくて、もっと振り向いて欲しかったのよ」

「あなたが何と言っても、どうにもならないし、俺、もうホストじゃないし、あなたとはもう無関係になつたからさ……」

「そんなのイヤっ」

真里香はいきなり純哉に抱きついてしがみついた。

「ち・ちよつと勘弁してくれないかな、離せよ。」
引きはがそうと必死の純哉。

純哉に必死でしがみつく真里香の姿に、真帆は唾然とした……。

執着する姿の醜さに、嫌悪感を感じた。

「真里香さん、霧夜君が嫌がってるでしょ？ もういい加減にしたら？」

困り果てる純哉を助けようと、真帆もつい口を挟む。

「実らない愛に執着するその姿、見苦しいって思わない？ そんな姿を好きだった人に見せていいのかしら？」

その一言で、ハツと怯む真里香。

「あんたいったい何様なの？」

真里香が怯んだ隙に、純哉は真里香の肩をグイと持って、自分から引きはがし、それから真帆を引き寄せた。

「こいつは、俺の本力ノ．．．」

「何ですって？ こんな地味でやぼったいお婆さんの何処がいいわけ？」

「あんたにはそう見えるかもしれないけど、俺には最高の女。だからもう帰ってくんねえか？」

そうこう揉めている間に、店の片付けを終えて、ほかのホスト達が店から出てきた。

「アニキ、どうしたんすか？」

影虎がこの状況に心配顔．．．。

今日は霧夜の送別会と言う事もあって、客とのアフターも無く全員、片付けを終えたら仕事終了と言う予定で全員一斉に出てきた。

ホスト全員一同が勢ぞろいすると、壮観な雰囲気になる。

その全員が、真里香の事を怪訝そうな目で見た。

「やめてよ。何でみんなそんな目で私を見るのよ。
皆だつて変だと思わないの？ クラブナンバーワンの霧夜が、こん
なやぼつたいおばちゃんか本力ノだつて……。笑えるじゃない。
」

初めに口を開いたのは、ナンバーツリーの聖だ……。

「似合いのカップルじゃん。俺は心から祝福するぜ」
他のホスト一同、聖に同調した。

「なんでよ」

「笑えねえけど……」

影虎が口を開いた。

「俺、初めアニキが真帆さんに服買つたり付き合う事にしたつて言
つた時、絶対ストーカーだから止めたほうが良いつていったんっス
よ。」

俺が余計な事言つたばかりに先輩も段々そんな気になって、真帆さ
んに酷い事言つて、追い払うような事してしまつて……。服代も
返せつて言つたそうっスよ。

その時真帆さんはどうしたと思うっスか？

先輩の新聞受けに、100万円の入った封筒ポーンと入れて、バッ
サリ先輩の前から消えて……。

俺、スゲーつて思つたっスよ。

やっぱリアニキの見込んだ人だけあるなつて……。

アニキ真つ青になつて探し回つて……。

彼女に本気なんだつて思つたっスよ。

真帆さんは、真里香さんみたいに執着したり、しがみついたりしないで、大人の女性って言うか、立派っスよ。俺も、姉さんみたいな人に魅かれるっス」

「影虎君．．．。そんな事があつたのね」

真帆は初めて知って驚いた。

「アニキ、俺をかばって言ってなかったっスか？」

「そんな事言う必要無いさ。俺が悪いんだし．．．」

真帆が真里香に優しく諭すように言った．．．。

「私も、何でこんな地味でやぼつたい年増の私の事、思ってくれてるのか？今でも良く分からないけど．．．。

それに、霧夜君は若いし素敵だし、もしかしたらこの先、良い人が現れるかもって不安にもなるし．．．。

でもね、どうなるかも分からない先の事考えて、その事に不安感を持って脅えてるのも無駄な時間だっと思っし、今この時を大事に思ってるの．．．。

愛情って、自分の気持ちを押し付けたり、強要する事じゃないっと思っの。

好きな人の事は、その人がどうしたら喜ぶか？ 笑顔でいてくれるか？ その為に何をすればいいかだっと思っの。

ただ甘やかすのではなくて、その人の為を思って、良い事が悪い事かも考えて．．．。

時には好きな人の為を思って、勇気を持って、意見する事も必要かもしれないし．．．。

好きな人の心が離れば、私は諦めると思う。

失ってしまった愛、実らない愛、消えてしまった愛．．．。
相手に強要して、愛を勝ち取る事が出来ると思う？

私は逆に憎まれて、嫌われて、醜い姿のまま好きな人の心の鏡に永遠に自分の姿が残る様な気がするの。そんな事は嫌だし．．．。

このままだと、あなたは醜い姿で霧夜さんの心の中に住み続けると思うの。

そんなの悲しくない？」

「そんなの嫌!!」

「じゃあどうすればいいと思う？」

「立ち去れって事？」

「それはあなたが決める事だから．．．」

聖が口を開いた。

「ホスト遊びは、本気になったら負けなんだよ。

それが出来ないんなら、ホスト遊びは足を洗ったほうが良いと思うよ」

麻生夫人が、真里香の肩に手を置いて言った。

「真里香さん、私はこの子達と同じ年ぐらいの息子を亡くしてるの。母一人、子一人の、この世の中でたった二人だけの家族だった大切な息子。

物凄く悲しくて、絶望の気持ちでいっぱいだったわ。

その淋しい気持ちを埋め合わせる為に、ここに何度も足を運んで
。。
特に霧夜君は、息子に似てて、一時息子と話している気分に入れて
。。

今は心の傷もすっかり癒えて、若い子達のエネルギーを貰って、楽
しい気持ちになる事がストレス解消なのよ。

ホストクラブってそういう場所じゃない？

この子達との接し方って、そういう物じゃない？

クラブにいる時間は、嫌な事も忘れて、思いきり楽しんで、ストレ
ス発散させて、自分の元気の糧にするって感じで。。。

お店を出たら、また元の自分に戻って、頑張る。。。

この子達も、店を出てプライベートの時間に変わったら、普通の人
。。。

だから、ずっと延長で、客の目線で、この子達に依存したり、何か
を強要したりしちゃいけないのよ。

ホストの世界は夢と幻。。。

夢の世界から抜け出せなくなってしまったのはダメなのよ。

キッチンとその事を理解して遊ぶなら良いと思うけど、それが出来な
いんならあなたには向いてないと思うわ」

真里香はそれからガツクリと肩を落として、ふらりと六本木の町に
消えていった。。。

真帆はガツクリ肩を落として去っていく、真里香の淋しそうな後ろ

姿を見てぼつりと呟いた。

「悲しそうな後ろ姿．．．。きつととても淋しい人なのね」

「仕事とか偽って来る子が多いけど、ホストクラブに来る殆どの客は、ホステスや風俗嬢らしい．．．。」

淋しい、悲しい女性を慰めて癒してあげるのも仕事だけど、時に、それだけじゃあ満足しないで、自分一人の物にしようとする子が現れて、時に大変な目にあうんだ。

ホスト遊びする金欲しさにお水系や風俗で働いて、それでも足りなくて借金抱えて、身を滅ぼしていく子も多い。

派手めで弾けた感じの若い子は大体、お水系や風俗の女の子だから、なるべく金を使わせない様に、煽り営業はしないようにと心がけては来たけど．．．。

相手がそれでも使うつて言えば、こっちも商売だから、断る訳にもいかないし．．．。

難しいなって思ったよ。

執着心の強い　そう言う子は、掛け（帳簿につけて飲む）をさせると後で物凄い額　未収になって、俺もホスト走りの時には数百万踏み倒されて、エライ目にあつた事もあつたし．．．。

俺は信頼出来るエースクラスの太客しか掛けはさせなかった．．．。

かなり気をつけていたけれど、彼女は結構借金抱えてると思う．．．。

彼女が金を使っても、あまりあからさまに喜ばないような態度をして来たし、時には店長に分からない様に、こっそり嗜めたりもしたんだけどさ．．．。

体すり減らして身を粉にして働いてホスト狂いしてもなにも残る物はないし……。

後には淋しさと虚しさと、借金が残るだけなんだ……」

純哉は、周りにいたピュアのホスト達が、神妙な表情をしているのに気がつく。

「あ……。みんなゴメン……。つい余計な事をいっちゃまった」

「俺、だからアニキについていって、堅気になろうって思ったつス。いつかホスト辞めたつて、普通の企業には使つて貰えないし、結局水商売系の仕事しかないし……。今辞めて、アニキの仕事を手伝うのつて、チャンスなんつすよ。大変さは十分分かつてるし、頑張る自信あるつス」

目を輝かせる影虎……。

「俺もホスト辞めようかなあ
ホツリと呟く聖。」

「おいおい、お前もやめたらヤバイつしよ。店が潰れるつしよ」
純哉が冷や汗を垂らす。

「近い将来辞めたら俺も雇つてくれよな。それまで店を大きくしておいてくれよ」
聖が純哉にニカツと笑いかけた。

他の皆も将来雇つて欲しいと一斉に言い出した。

「おいおい……。俺の店はフラワー装飾技能士検定2級以上の資格がないと雇わんし、そんなに従業員要らないつて……。それに

すぐ潰れちまうかも知れないしな」

「アニキなら大丈夫っスよ」

ニカッと影虎が笑った。

「うん。私も大丈夫って思うな」

真帆もニッコリ笑う。

真里香の騒ぎで真帆は手に持っている花束の事をすっかり忘れていた。

「さっきから気になってたんだけど、その花束は俺に？」

「あ．．．すっかり忘れてた。これあなたに．．．。今までお疲れ様」

「ありがとう。なんか催促しちゃってごめんな」

「私こそ手渡すのが遅くなってごめんなさいね」
それは神秘的な青いバラの花束だった。

「ベンデラブルーのバラの花束だね」

「うん。青いバラの花は不可能とされてきたらしいけど、2004年に青色色素のバラの花が開発されたそうね」

「まだまだ商品化にはならないらしいけどね」

「この花の花言葉が、『奇跡』とか『神の祝福』って知って、この花に決めたの。あなたに似合ってるので．．．」

「嬉しいな・・・」

熱い目で見つめ合う2人・・・。

「コホン・・・。あのお二人さん周りに俺らがいる事忘れてない？」
聖が茶々を入れる。

「あはは、ゴメンな」

照れまくる純哉。

「俺も、真帆にプレゼント・・・」

「何かしら？」

「遅くなってゴメンな」

そう言つて、ポケットから指輪を出して、真帆の左手薬指にダイヤの指輪をはめた。

キラキラと光り輝く指輪・・・。

「綺麗・・・」

「婚約指輪だ・・・」

「ありがとう・・・とっても嬉しい・・・」

「じゃあ、明日婚姻届一緒に出しに行こうな」

「早っ」

目が点になる真帆。

「早っじゃないの！俺がホスト辞めたら、かみさんになる約束っしょ」

「そうだったの？」

「あのなー」

苦笑する純哉。

一斉に周りのみんなが大笑いする・・・。

「私も見守ってあげるから・・・。時にはビシビシ口を挟むつもり

」

麻生夫人もニッコリ。

「じゃあ俺、その資格取れるように頑張っておこう・・・」
聖も笑顔で言った。

* * * * *

皆と別れて純哉と真帆は、店から代々木のマンションまでタクシーに乗った。

代々木のマンションに到着すると、純哉と一緒に降りて来たので、真帆は『あれ？』と言う表情をした。

「今日から俺、ここに住むから・・・」

「え？」

「え？ じゃないっしょ。俺達明日届け出したら夫婦なんだから・・・」

」

「まだ実感湧かない．．．」

「一緒に住んでるうちに実感湧くよ」

純哉は少しづつ自分の荷物をこちらのマンションに送り込んでいた。送って来たのはたったダンボール3箱だけ．．．。

「俺の荷物あれだけなんだ。引っ越し完了．．．」

「嘘ーっ」

目が点の真帆。

「あのマンションは俺の代わりに聖が入る事になった。

でさ、今日から聖が住むんだ。デーハー（派手）な服やスーツはもう要らないし、家具もお水っぱい家具ばっかだし、全部くれてやった」

「でも荷物あれだけなんて．．．」

「俺、少しの荷物と身ひとつで真帆の所にお婿にきまーすなんてね」

驚きすぎて、口がパクパクな真帆．．．。

「あれっ？ 嫌なわけ？」

「そうじゃないけど、大胆すぎるし、何も心構えもしてないのに．．．」

「何の心構え？」

そう言っつて、真帆に抱きつく純哉．．．。

「キヤッ」

「何ビビってんだよ。エレベーター乗るぞ」

「こ・こ・公共の場所でそう言う事はやめてよね」

「夜中の2時過ぎに誰がいるんだよ。家に帰ろうハニー」

そう言っつて真帆を抱きしめたまま、降りてきたエレベーターに乗り込んだ。

真帆ピンチ？ この二人どうなる？

(第7話に続く)

第7話 トラウマと代償

純哉に抱きつかれた状態でエレベーターに乗った真帆は、発作的に純哉を押し返した。

「きゃっ！ やめてっ！」

思わぬ反応に驚く純哉。

「ごめん。嫌だった？」

その後はお互い無言状態……。さっきまでの和やかな雰囲気は脆くも壊れて、険悪な空気が漂う。。。

マンションについて険悪なまま部屋に入る二人。。。

「俺と一緒に住むの嫌？」

「うっん。ちょっとビックリしただけ」

「今日からここに住んでも大丈夫？っていうか、住む家もうここしかないんだけど。。。」

「初めからその予定でここを借りたんだし、大丈夫」

「良かった。嫌われたのかと思った。。。」

「そんな事ないよ」

その言葉とは裏腹に、真帆は不安感でいっぱいになった。大好きな純哉なのに、抱きつかれて突然過去の嫌な感覚が蘇ってきて

た。

原因は何となく感じていた、父親から受けた過去の嫌な記憶とその時の感情と感覚……。

今まで封印されていた過去の小箱の中から一気に溢れ出すような、そんな感覚……。

純哉も浮かない顔の真帆の様子に気がついて、不安でいっぱいだった。

真里香とのあのやりとり、ホストだった自分の醜態の姿をさらけ出してしまつて、嫌われたのかもしれない。

結婚を考え直させるような題材になつたのではないか……。

入籍後に一緒に住む予定で借りたマンション。

家具や食器など家財道具一式、少しずつ一緒に選んで揃えた。

寝室のダブルベッドも……。

この家には寝具はこれしかない……。

おっとり型の真帆は、一緒に住むのはもう少し先の事と思っていた。

まさか今日だったなんて……。

今日からここで二人？ 嘘みたい……。大丈夫？ 心配……。

真帆はずっとその事ばかり考えていた。

「真帆……真帆」

「あ、えっ？」

「さつきから呼んでるんだけど、黙り込んでどうしたの？」

「う、ううん。何でも」

「こんな時間だし、風呂入ってもう寝ようよ」

「うん。純哉先に入っつていいよ」

「わかった」

暫くしてバスルームから出てきた純哉にドキツとした。

濡れ髪をタオルで拭きながら、パジャマ代わりのスウェットの上

・素足の足の指が長くてとても綺麗・・・。

美術館で、美しい象を見ているような感覚に襲われる。

石鹸のようなホワンと良い匂いが広がる。

「速効であがったよ、真帆も行っつてくれば」

「うん」

パジャマや着替えなど一式抱えて、バスルーム脱衣室に行っつてから、真帆はドキドキした。

まさかいきなり、ドア開けて入っつて来ないよね・・・。

心配でいつもよりも猛スピードで風呂に入った。

風呂から上がったら、今度はスツピンのパジャマ姿の自分を純哉に見せるのが恥ずかしいし、怖い・・・。

もたもたと髪の毛を乾かしたり、化粧水を付けたりお肌の手入れをしたりしたが、あまり長いと変に思っつかもしれないと意を決して脱衣室から出た来た。

一応カーディガンを羽織っつたけれど、やっぱりパジャマ姿に変わらない・・・。

純哉は部屋のライトを落として、リビングダイニングのソファに座っつて、テレビを見ていた。

ライトを落として間接照明だけにすると何となく怪しげな雰囲気．．．
真帆の方からだと純哉は後ろ姿なので、正確に言つとまだ真帆の方は見てない．．．。

なんて声をかけようか？ 一瞬戸惑った．．．。

「純哉．．．。あがつたよ」

ありきたりな言葉だ．．．。

「．．．．．」

返事がない。

「あれ？」

近付いて顔を見たら、テレビつけっ放しで眠っていた。

「純哉、風邪ひくよ」

そつと肩を揺すつて起こす。

「ん．．．あれ寝ちゃった？」

目が開いたら、真帆のパジャマ姿を楽しそうな嬉しそうな表情でジーツと見た。

「真帆のその姿、可愛いね」

「き、汚いスッピン顔を見せちゃって、ごめんね」

うわっ。恥ずかしすぎる．．．。心臓はバクバク．．．。

「うっん。可愛いよ。今日から一緒だね」

純哉が立ち上がって、真帆を抱き寄せてくちびるを重ねてきた。

真帆にとってはファーストキス。

今まで、キスの味って？ どんな感じ？ 一人恥じらいながら、あ

れこれ想像した事もあつたけれど・・・。
イメージとは違っていた。

心臓はバクバク・ドクドク鼓動するけど、全然ロマンティックじゃない。その後の事が恐くてそれどころではない・・・。
気持ちはムンクの叫びの様な感じ・・・。

その後の事はかり考えて、心の中はパニック状態だ・・・。
こんな行き遅れのおばさんが、若い純真な少女の様な事を考えて、
酷く恐れてるなんて・・・。

そんな自分がやぼったく、恥ずかしくも思えたが・・・。

「キヤツ!!!」

純哉はお姫さま抱っこをして、ベッドルームまで連れて行った。
憧れのお姫さま抱っこだけど、恐すぎてそれどころではない。

『時間よ止まれ!!!』と真帆は思ったけれど、小さな2LDKのマンション、あつという間に寝室に使っている7.5畳の洋間に到着した。

そつとベッドに降ろされて、自分の上に純哉が覆いかぶさってきた。

『もうダメ!!!恐すぎる・・・』

ギョツと目をつぶって、固まっていたら、純哉の動きが止まった。
ゆくり片目を開けたら、純哉が不安そうな表情で見つめてる顔が見えた。

「嫌そうに見えたのだけど、俺の事嫌い？」

私は観念して、自分の心のうちを打ち明ける事にした。

「ゴメンね。さっきエレベーターの中でも変だっと思ったと思うけれ

ど．．．。

急に父親との嫌な記憶がブツツと蘇ってしまつて、あなたの事大好きなのに、その反面とても恐ろしくて．．．。不安でたまらないの．．．。

若い純情な女の子だったら許せると思うけど、こんなおばさんでこんなの変でしょ．．．。ゴメンね。
あなたと結婚する資格がないよね。

純哉と付き合い始めて、キスの味ってどうかな？とかあれこれ想像したりもしたのだけど．．．。とつても恐かつたの．．．。
ファーストキスは恐怖でいっぱいだよ．．．。ガツカリだよ。ごめんなさい

「男性恐怖症？」

「自分で気づかなかつたけど、もしかしたらそうかもしれない．．．。嫌になつちやつたよね」
半ベソ状態の真帆。

「俺、そんな真帆でも好きだし愛してるし、無理強いしないから．．．。」
一歩一歩、歩み寄つて前進していこう．．．。

「こんな私でも、嫌にならないの？」

「嫌になんてなるものか。真帆とおやつさんとの事思えば、そうなるってしまつのも分かる気がする．．．。」
少しづつ恐怖を克服して、いつか本当の夫婦になろう

「うん」

「安心した？」

「うん」

「じゃあ暫く、手を繋いで寝るのはいいかな？」

「うん。ごめんね。私、頑張るから」

「大丈夫になつたら、許可のサイン送つてよ」

「うん」

真帆の事を思いやり、決して無理強いはしないその誠実な純哉の態度に、真帆はとても安堵感を感じた。

取り合えずホツとしたけど、純哉に申し訳がなさすぎる・・・。

世の女性が憧れて、恋人になりたいと思う人がいっぱいいると思うのに・・・。

自分には勿体ないぐらいの人なのに・・・。

気持ちが焦るが、心がついていかない。

ゆっくりゆっくり、一つ一つ、恐怖心と不安感をはね飛ばして、いつか純哉と結ばれたら・・・。

ごめんね、頑張るから・・・。

それから朝がやって来た・・・。

純哉と一緒に迎えるはじめての朝・・・。

一緒に住む時の事、一緒に迎える朝の事・・・。

あれこれ色々想像して、きっと何もかも新鮮で、輝かしいばら色の朝なんだろうなと思いついて描いていた・・・。

楽しい新婚生活が始まるんだらうなとワクワクした．．．
それなのに．．．。それなのに．．．。

隣で寝ている純哉．．．。

寝顔が素敵．．．。

こんな優しく、愛おしくて、素敵な人の事、何で怖いと思ったの
だらう．．．。

どうすればいいんだらう．．．。

自分からキスしてみたら？ 出来る？

大丈夫恐くない．．．恐くない．．．。

そうつと顔を近づけていく。

恐くない．．．。

何度も何度も自分に『大丈夫』『恐くない』と暗示をかけた。

このまま接近したら、あと少しで彼の唇に．．．。

そつと触れたら、心がドキンと高鳴った。

ふわつとした温かな柔らかな感触．．．。

サツと離れて、クルツと背を向けて、悪い事をしたイタズラっ子の

様に息を殺して固まった．．．。

ドキドキ．．．バクバク．．．ドキドキ．．．バクバク．．．。

彼に触れて心が時めいた自分に驚き、そしてホツとした。

これって正常な感情だよな？

大丈夫！！ 克服出来る．．．。

自信に繋がった。

一步一步、少しずつ歩み寄ろう．．．。

私は純哉の事、愛してる。

だから大丈夫！！

純哉は相変わらず、軽い寝息を立てて寝ている。

ホワツと、彼の甘いコロンの香りがした。

* * * * *

・・・美味しそうな朝ご飯の香りで、純哉は目が覚めた。起き上がって、ダイニングに行くと、キッチンに、エプロン姿の真帆の姿が見えた。

今まで、ずっと一人で適当に食事を済ませていた純哉。とても新鮮で感動的な光景だ・・・。

「おはよう」

「おはよう」

「なんかさあ。真帆のエプロン姿、感動的だな・・・」

「え？ 本当？ ありがとう・・・」

「あのさ、抱きしめてもいい？」

「うん」

昨日の事があったので、純哉は気を使いながら優しくふわっと抱きしめた。

「感動だな」

「昨日はごめんなさいね。」

私、早く克服出来るように頑張るから・・・。努力するから・・・。

「無理しなくていいからさ。俺、真帆が側にいてくれるだけで嬉しいから」

「私ね、一步前進出来たかもしれない」

「え？」

「朝、あなたが寝てる時、そっとキスしてみたの……。昨日は恐いって恐怖心と不安感だけしか無かったけれど、さっきは心がドキドキ時めいたの」

「え？やだなあ。俺の寝込みを襲ったわけ？」

そう言つて、純哉は頭を掻いて、照れた。

その表情はとても嬉しそうだ。。。

「うん。襲っちゃった」

「もう一度、キスして。。。」

「うん」

真帆は、急に真剣で緊張の表情に変わつて、ゆっくりと純哉に近づく。

少し震えながら、純哉の背中に手を回し、背伸びして顔を近づけて、そっと唇を重ねた。

緊張感が伝わってくる、ぎこちないキスだったけど、純哉はとても感動した。

今までで一番神聖で、純粹で、優しいキスのような気持ちでした。

「真帆、ありがとう……。俺凄く感動した。俺、真帆のペースに合わせるからさ。。。」

「ごめんね。きつと辛いと思う……。沢山我慢させちゃってるよ

ね？ 本当にゴメンね」

「気にすんなよ。俺、真帆の事全部受け止めるからさ。．．．」

「うん」

「後でさ、一緒に婚姻届出しに行こう。．．．」

「こんな私でもいいの？」

「全然オツケーだから」

「うん」

* * * * *

それから二人一緒に婚姻届を役所に出しに行き、受理された。

今日から夫婦だ。．．．。

まだまだ問題は色々あるけれど。．．．。

二人とも、盛大な結婚式は望んでなかった。．．．。

そのうち新婚旅行も兼ねて外国で、二人だけの結婚式をあげようと決めた。

「紙ひとつ出して、受理されて、ハイ！ 今日から夫婦ですって。．

。簡単だよな。．．．」

「本当ね。まだ信じられない。．．．」

「でも、もう真帆は俺のかみさんだ。．．．」

「純哉は夫？ まだ実感が湧かないな」

「一緒に過ごす時間がどんどん増えていったさ、やがて夫婦らしくなるさ」

「ええ。そうね。これからどうぞよろしくお願いしますね」

「俺も、よろしくな。今日は夫婦になった記念にレストランで食事しような」

「わあ。嬉しいな」

「何がいいかな？ フレンチ？ イタリアン？ 和食？ 中華？ 高層ビルの最上階のレストランとか、ディナークルーズもいいかもな」

「夜景を見ながら食事したいなあ」

「オツケー、じゃあ探してして予約入れるな」

そう言つて、ポケットから真帆とお揃いのスマートフォン携帯を取り出した時だった。

着信音が鳴り、影虎から電話がかかって来た。

電話に出て暫くしたら、純哉の顔色が曇り深刻そうな表情に変わった……。

電話が終わったあとには、ガラリと表所が暗く険しい感じになった。

「純哉、何かあったの？」

「ゴメン、食事はまた今度でいいかな？ 急用が出来ちゃった。俺、ちよつと影虎に会いに行つてくるわ」

「分かった……。じゃあ先に家に帰ってるね」

「ゴメンな」

そう言つて、純哉は慌てて駅に走つて行つた。

「どうしたんだろう……」

昼になつて、夜になつて、晩ご飯を作つて待つていたけれど、純哉は全然帰つて来なかつた……。

「何かあつたのかな？」

深夜になつて、純哉は帰つてきた。

酔っぱらうほどではないが、ちよつとお酒を飲んで来た様で、お酒の香りがする。

「お帰りなさい。何かあつたの？ 大丈夫？」

「あ、うん。今日はゴメンな」

「ご飯食べた？」

「うん。影虎と一緒に……」

「そう」

「連絡入れなくてゴメンな。ずっと待つててくれたんだね。連絡入れば良かった……」

「ううん。気にしないで・・・」

それからベッドに入っても、純哉は寝れない感じだった・・・。
一体何があったのだろう・・・。

その日から純哉は、思い悩んでる様な感じで、元気がなかった。

「ねえ、何か心配事があるの？」

「うん。ちょっとね。そのうち話すから・・・」

「分かった。私で良かったら、力になるから・・・。そのうち話してね」

もしかしたら、私の事かな？と不安になった。

婚姻届も出して、夫婦となったのに、自分のトラウマのせいではなかなか夫婦の関係になれない・・・。

きつとそうだ・・・。

それから純哉は思い悩んでいる感じで元気がなかった。

私のせいでゴメンね。

その日の晩、まだ恐かったけれども、純哉を悲しませて苦しませ続けるなんて・・・。

自分の事がとても小さな事のように思えて来た。

もう私は大丈夫・・・。もう恐ろしくない・・・。

大丈夫になったらサインを送ってって言ってたけど、どうすればいいのかな？

「ねえ、純哉・・・」

「え？ 何？」

「多分、もう大丈夫そう．．．」
そう言つて、純哉にすり寄つて抱きついてみた。

「あ、俺、トイレ行つてくるわ」
慌てて離れる純哉．．．。
それから長い間戻つて来なかつた。
困つた表情だつた気がした．．．。

やっとの事で、純哉に身を寄せたのにアツサリと拒否されて、とてつもないシヨックを受けた．．．。
自分立ち直れないかも．．．。
自然と涙がこぼれた。
純哉よりも全然年上なのに、臆病で中身は幼稚な子供．．．。
きつと嫌われたんだ．．．。
もしかしたら魅力がないのかもしれない．．．。

(第8話に続く)

第8話 純哉の憂鬱

純哉にアツサリと拒否されて酷く落ち込む真帆．．．。

そんな悩みを話す相手もないし、そんな事で落ち込む自分も恥ずかしい気がするし．．．。

一応平静を装ってはみたものの、心の中は暗闇でいっぱいだった。こうなったのも、自分が蒔いた種だ。

元々母親から、自信の失う事ばかり言われ続けて育ってきた真帆。自分に自信が無いのに、益々無くなってしまった．．．。

心の救いは仕事を辞めなかった事。

母親と一緒にいる時には高校を卒業して、地味な工場のラインの仕事をしていたが、母親が他界して、工場を辞めて、ずっとやりたかったビーズアクセサリーのパーツショップの仕事をすることにした．．．。

母親から色々な楽しみを奪われ続けてきた真帆の唯一の楽しみが、ビーズアクセサリー作りだった．．．。

パーツも小さいから、持ち運びも出来て、何処でも作る事が出来る．．．。

美しいビーズを見てみると、幸せな気持ちになって心が癒された。パーツショップは、アルバイトから入社して、とうとう社員になれたばかり．．．。

「純哉、仕事に行ってくるね。帰りは遅くなると思う．．．」

「分かった。俺が家の事やっておくから．．．。晩ご飯も作るよ」

「お願いしてもいいの？」

「今日は予定無いし、店舗が完成してオープンするまでは、プー太郎みたいなものだからさ。

勿論色々準備に忙しい時もあるけどね．．．」

「うん。分かった。じゃあ行ってくるね」

「いつてらっしゃい」

何事も無かった様な会話だが、お互いにハグする事も無くなり、ギクシャクした感じた．．．。
大好きな人と一緒に暮らしているのに楽しくない。とても疲れる．．．。

真帆は家を一步出て何故だかとてもホツとした。

* * * * *

店が終り、家に帰る頃になると気が重くなる．．．。
何となく寄り道したくなって、お店をぶらぶらする。
母と一緒に暮らしている時には、金銭的に余裕も無かったし、オシヤレする自由も無くて、お店を巡るなんて考えも浮かばなかったけれど、最近は楽しい．．．。

女の子っぽいフェミニンなかわいい服．．．。

リボン、ギャザー、レース．．．。

『そんな服 いやらしい!!』 『あなたには似合わない!!』 『ふしだらな娘に見える!!』

時々亡くなった母の声が聞こえて来て、一瞬戸惑うけれど、もう惑わされない．．．。

今まで着れなかった分、オシャレも楽しみたい．．．。
お化粧だって、今流行の物をつけてみたい．．．。
今まで着れなかった優しいピンクのニット、フェミニンなレースの
ついたブラウス、パールの入ったアップルレッドのルージュを買っ
た。

美容院に行つて、ふわゆるパーマをかけてみた。

ほんの少しブラウンにカラーリング．．．。

仕事の帰りに美容院なんて、時間もかかって帰宅時間が遅くなるけど、今日は何となく時間稼ぎして遅く家に帰りたい気分．．．。

帰り道、シヨウウィンドーに自分を写す。

さつき化粧品を買ったので、サービスにメイクをし直してくれた。

目元にキラキラのパール、アップルレッドのくちびる．．．。

こうやって見ると、ちょっと綺麗になったみたい．．．。

初めて純哉と出会った時の自分と比べると、全然別人のように見える。

純哉と一緒に歩いてても、つり合いそう．．．。かな？

彼は気づく？

最近何となく距離を置かれているみたいでちょっと冷たいし、何も
言わないか．．．。

重い足取りで家に帰ってきた。

自宅玄関扉の前に立って、一度深呼吸。

気を取り直して、玄関扉を開ける。

「ただいま」

「おかえり」

エブロン姿の純哉、なんとなく可愛い．．．。
純哉は真帆の姿を見て、ポーツと固まった。

「ヘアスタイル変えた？ 朝とメイクも違ってない？」

さすが元ホストだけあって、女性の微妙な変化にはすぐ気がつく．．．。

「へ・変かしら？ ちょっと変えてみたのだけど．．．」

「いやあ。真帆はどんどん綺麗になって、俺はどんどん置いていかれる気がしてくるよ」

頬を薄ピンクに染めて、嬉しそうな顔の純哉。

『良かった．．．』

凄く心の中で安堵した。

「私も綺麗にしたら、少しは純哉とつり合つかない？」

「全然俺の方が置いていかれてる気がする．．．。真帆だけどんどん綺麗になってさ．．．。」

ほかの奴にとられないかと心配になってくるよ」

そんな事ありえないと思って、大笑いしてしまった。

「まさか、こんな変なおばさん、誰も気にかけないわよ」

「真帆は自分の価値を全然分かって無いんだよ．．．。どれだけ素敵な女性かって．．．」

いつもだったら感動してしまう言葉も、今日はあまり感動しない。

「そんな事ないわ。私は全然、何も持っていないわ」

「自分の事そんな風に思ったり、そんな目で見ちゃダメだよ」

「だって、全然自信無いもの」

「真帆はいつも自信が無いんだな」

「そう……。親に褒めてもらった事なんてあったかな？って思うくらい貶されてばかりだったから、自信無い」

「じゃあ俺がこれからはいっぱい褒めてあげるよ」

「心にも無い言葉は嫌よ。本当の事をいつでも言ってる」

「うん。いつも本当の事だから……」

なんだか純哉の心の中が最近分らない。

とても感動的な思いやりに溢れた言葉なのに……。

本当の事なのかってちょっと疑ってしまう……。

「さあ、そんな所に突立っていないでさ、今日はイタリアンだから、これからパスタ茹でるから待ってて」

「凄いね。すぐに着替えて、手洗いうがいしてくるね」

「うん」

真帆が着替えて用意したら、丁度料理が出来上がった。

今日のメニューは、ペスカトーレに、グリーンサラダとオニオンスープ、薄切りのガーリックフランスパン。

「プロ級の腕前ね」

「パスタ料理と、洋食系や、外食系メニューは結構得意なんだ、けどお袋の味的な和食や家庭料理メニューは全然……。食べるのは好きなんだけどね。だから真帆の料理好きなんだ」

「ありがとう……。私は子供の頃、殆ど外食に連れて行って貰った経験が無いし、一人で外で食事は苦手だから、こう言うメニューは外食に連れて行って貰ったみたいで嬉しいな。洋食結構好きよ。とっても楽しみ……」

「本当？　じゃあさ、これからも色々作ってあげるからさ」

「うん」

「真帆は和食や素朴な家庭料理、これからも色々作ってよ」

「うん」

「ワインも冷やしてあるんだけど、飲める？」

「うん」

「店にきた時あまり飲めない様に言ってたけど……」

「あの時はあまり飲んだ経験が無かったから、自分の限度がどのく

「らいか分からなかったの。家で飲んでみたら意外と平気だった．．．」

「なーんだ」

なんとなくご機嫌な感じの純哉。

朝は元気無かったのに、どうしたんだろう．．．。

真帆はとても気になったけど、聞きづらくて聞けない。

「ご飯が終って、一緒に片付けて、ライトを落としたリビングのソファーに並んで座って一緒にワインを傾ける．．．」

「真帆ってアルコールけっこういけるじゃん」

「それまで殆どお酒なんて飲んだ事がなかったけれど、一人暮らしするようになって、毎日ちょっと飲むのが楽しみになったの。色々試したけど、私はサワーと、発砲ワインが好きだな」

「俺はさ、何でもオツケーだよ。これから真帆に合わせる」

「合わせなくていいよ。それぞれの好きなお酒を交代で飲みましょうよ。一緒に飲むのって楽しいね」

「うん。俺、中2から家族無くなったじゃん。家族が出来てとても嬉しいんだ。俺達もう家族じゃん。」

真帆にスピードで結婚迫ったのも、今思えば、早く家族になって貰いたかったのかも」

「そう言って貰えるとても嬉しいな。私も独りぼっちじゃなくなつたし．．．」

純哉が真帆の肩にそつと手を回して、引き寄せて抱きしめた。

「最近ね、純哉が私に触れてくれない気がして、避けられてる気がして、とても不安だったの……。嫌われちゃったのかもって」

「そんな事ないよ」

驚き顔の純哉。

「そう思い込んで、そうでなくても自信が無いのに、更に自信が無くなってしまって、今日は本当はあまり家に帰りたく無いなあって思って、フラフラシヨップिंगしたり、美容院に行ったり……。仕事が早く終わったのに、ウダウダと時間つぶしてたの。ごめんなさいね」

シヨツクな顔の純哉。

「俺、真帆にそんな思いさせてたんだ。ゴメン」

そう言ってから、立ち上がってローボードの引き出しから封筒をとり出して、戻って来た。

「俺さ、真帆に物凄く謝らなければいけない事があるんだ」

「なにかしら？」

いつになく真剣な顔の純哉に、緊張する。

「この間さ、影虎から電話がかかって来ただろ？」

あの時さ、店の常連だった『美幸』がさ、病気で死んだって言う話でさ……。

その病気が『AIDS』だったんだ。

店では社長令嬢って言うてたし、金遣いも半端じゃなくて、太客って言われてるお得意様で、男癖も悪くてさ．．．。店のホスト片っ端からたぶらかしてた．．．。で、影虎も関係もった事あって、自分もうつってないかって真っ青でさ．．．。

それに俺もさ．．．。

大分昔だけど一度だけ関係持った事があるんだ．．．。

ホストがやってはいけない事を『爆弾』って言うんだけどさ、店の客と関係持つのには『爆弾』に値するんだ。

だから本当はいけないんだ．．．。

でも裏では結構こう言う事やっててさ、俺も、ごひいきの太客だし、つなぎ止めておこうと思っただけで関係持ってしまったんだ。

本当に俺ってどうしようもない馬鹿な奴なんだ。

それで影虎と二人して真っ青になって、病院に検査受けに行っただけ．．．。

今日結果が出たんだ」

「え？ それで．．．」

真帆は真っ青になった。

純哉は封筒から検査結果の紙を出した。

「大丈夫だった。性病とか他の病気も全て検査受けたけど大丈夫だった．．．」

「良かった．．．」

それから純哉は正座して両手をついて真帆に謝った。

「本当にゴメン。真帆と出会ってから絶対裏切るような事はしてないけど、それ以前は遊びまくって悪い事してた。その代償が今ごろ大きな付けになって襲いかかってきて、本当に反省してる」

「昔の事は良いから、何も責めたりしないから、謝らなくても大丈夫よ。」

検査結果クリア出来て良かったね。本当に良かったわ」

「だからさ、この間真帆がくっついて来た時、逃げ出したんだ。あの状態だと俺、真帆の事襲っちゃいそうだし、もし病気だったらうつしてしまうし……。必死だったんだ……」

「え？ そう言う事だったの？」

「うん」

「私はてっきり、あなたに我慢させてばかりで嫌われてしまったのだと思って……」

「ちがう ちがう……」

「良かった……」

「だからもう大丈夫だけど……」

「えっ。いきなりそんな事言われても……。私、すっかり自信失ってしまって……」

「ごめん。折角のチャンスを逃してしまった」

ガツクリ落ち込む純哉。

「ずっと待ってるから、サイン送ってよ」

「うん」

* * * * *

――夜ベッドの中。。。

「ねえ、抱きしめて寝るのは良い？」

純哉がやわらかな優しい顔で真帆を見つめる。

「うん」

それから、純哉は真帆の方に近付いて、手を伸ばした。甘くて爽やかな純哉のコロンの香りがふんわり広がる。

真帆は、純哉の腕の中にすっぽり収まり、両手に温かく包まれる。安心感で心が満たされる。

「キスしちゃダメ？」

今日は積極的な純哉。。。

「いいよ」

頬を染めて恥じらいながら応える真帆。

優しくそっとくちびるが触れたら、真帆の心に電流が走った。

始めてのキスは、恐いだけで心が時めく事なんて絶対になかったけど、今日は心がドキドキ時めく。

いつもはそっと唇が触れ合って終りのキスだけど、今日はディープ。。。

初めての経験に、真帆は戸惑いとても驚いたけれど、でも、嫌じゃなかった。心がとろける様な甘いキス．．．。

長く深いキスの後、やっと真帆を開放してくれた純哉。とろける様な目で、お互い見つめ合う。

始めに口を開いたのは真帆だ。

「ねえ、私 大丈夫そう．．．」

「いいの？ 今のサイン送ってくれたの？」
頬を紅潮させ、喜びに目が輝く純哉。

「うん」

はにかみながら応える真帆。

(第9話に続く)

第9話 穏やかな時間と突然の嵐

――朝がやって来て、目覚める真帆．．．。
優しく宝物のように純哉の腕の中に包まれて、幸福感と安らぎの気持ちで心は満たされている。

私は今まで何を不安に思い、何を恐れていたのだろうか．．．。
子供の頃の父親との忌まわしい記憶がトラウマとなって、男性恐怖症になってしまったのだとずっと思い込んでいた。

だけど母親から蔑まれ、存在を消されてしまった扱いをされ、自由を奪われ、自信と言う可能性の翼をもぎ取られ、飛べない鳥となっていました．．．。

そんな自分に恐れていたのかも知れないと思った。

自信が無く、とても醜い自分．．．。価値のない自分．．．。
純哉に相応しくないのではと、深層心理の中で、自分の全てをさらけ出す事を恐れ、逃げようとしていたのかも知れないと感じた。

翼を失った鳥に、綺麗な大きな羽を付けてくれた人は、私の隣で眠る人、純哉だ．．．。

なかなか過去の呪縛からはそう簡単に逃れられ無いと思うけれど、彼がいつも側にいてくれたら、この先も大丈夫．．．。
真帆は心地良い安らぐ気持ちの中で、そう思った。

温かく包まれた純哉の腕の中でまどろんでいたら、純哉の手が動いて真帆の髪の毛を優しくなでた。

「起きてたの？」

真帆が純哉の腕の中から顔を出し、彼の顔を覗き込む。

「うん。少し前に目覚めた。真帆も起きてたの？」

まだ目はつむってるけど、頭ははつきり起きてる様子の純哉。

「私も少し前に目が覚めたの。もうそろそろ起きないと．．．」

「このままずっとこうやっていたいにな．．．。残念！」

「これからずっと一緒だから．．．」

「そうだけどさ、名残惜しいな．．．」

お互いに微笑み合って顔を見合わせる。

これから出勤の真帆に、純哉が慌てて声をかける。

「今日は仕事何時まで？」

「今日は早番だから、夕方5時30分には終ると思うわ。」

「じゃあさ、店の前に突立ってるからさ、一緒に食事に行こうよ。

この間、一緒に食事出来なかったからさ」

「わあ！嬉しいな」

「俺も今日は、建築メーカーと打ち合わせ．．．。早く箱物建てて、店オープンさせないと．．．」

「うん。私もオープンが楽しみだわ．．．。あ、もうこんな時間．．．」

「じゃあ後で会おうね。いつてらっしやい」
そう言っつてハグして優しくキスする純哉。

純哉は真帆の後ろ姿を見て、ここ数カ月でなんて綺麗になっただろうと感じた。

芋虫からサナギ．．．そして美しい羽を広げる蝶のように見えた。

初めて店にやって来た時は、可愛い芋虫．．．。
ぽっちやりした、昭和初期コーデガール．．．。
ちよつと驚いたが、あの時もなかなか味わいがあったな．．．。

今は、大空に飛び立とうと綺麗な羽を広げる蝶だ．．．。
本当に大空に飛び立たれてしまつては困るけれど、俺という花をと
ても気に入れてくれるようだから、ずっと、側にいてくれるだろ
うと思つた。

真帆の方も通勤電車の中であれこれ回想していた。
いつもと変わらない朝．．．。
だけど世の中全てが光り輝いているように見える．．．。

初めて出会つた時の純哉（霧夜）．．．。

この世の中に、こんな綺麗で存在感のある人がいるのかと驚いた。
それと同時に、私とは世界の違う別次元の人だと思つた。

まさか私の事を愛してくれて夫になる人だなんて．．．。
今でも信じられない．．．。
でも幸せ．．．。

純哉と出会つてまだ1年もたつてないのに．．．。

ここ数カ月の慌ただしい変化の事を思うと、実感がなかなか湧いて来ない。

でも真実だ。

今を大事に思い、一生懸命に、大切に過ごそうと、改めて思った。

* * * * *

お店が終ってから真帆は、約束の場所に、歩いていった。
店のショーウィンドーの前に純哉が立っているのが見えた。

ホストを辞めてから、ライトブラウンでホス・ウルフヘアだった髪形も、黒髪に戻し、ヘアスタイルも流れるようなラインのストリートショートヘアに変わり、服装も黒や紫を基調とした、ホストっぽいファッションが多かったが、ナチュラルなカジュアルスタイルに変わった。

変化しても、やっぱりカリスマ性があって目立つ．．．。
行き交う女性が振り返ったり、チラ見したりするのが分かる．．．。

「純哉．．．お待たせ．．．」

にっこり笑って手を降る純哉．．．。

「ここまで歩いてくるまでの間、純哉って素敵だなあって見とれちゃった」

「なんかむず痒いな．．．。照れるよ．．．」
照れまくる純哉。

「この間行こうって言った、夜景の綺麗なレストラン予約したから行こうぜ」

「うん」

純哉が真帆の手を取って、自分のジャケットコートのポケットに入れた。

「温かいなあ。私ね子供の時の記憶で、母に手を繋いでもらったり、抱きしめてもらったり…。そう言うスキンシップの記憶が無いから、凄く嬉しくて心の中が暖まる気持ちなの」
真帆が幸せそうに微笑む。

「じゃあ俺がいっぱい、ハグして、手を繋いで、あつためてやるよ」

「うん。何かね安心感があるって言うか、凄く幸せ気分…。」

純哉も嬉しそうに微笑む。

* * * * *

。。。そこは新橋駅近くの高層ビルのフレンチレストランだった。。。

東京タワーとレインボーブリッジが見えて、一面銀世界のように夜景が美しい。。。

「わあ、素敵ね。。。こういう場所は初めてだから緊張するわ」

「大丈夫！楽しもうね」

「うん」

それから、シャンパンで二人で乾杯・・・。

「スピード結婚だったから、まだ式も挙げてないし、結婚指輪も買って無くてごめん。今度の休みに指輪を買いに行こうな」

「うん」

「それから結婚式だけだし、新婚旅行も兼ねてヨーロッパなんてどうかな？」

「スイスでさ、城の中にチャペルがあつて結婚式が挙げられる所があるんだけど、どうかな？」

「わあ、素敵ね・・・」

「着物も着たい？ それだったら国内になるけど・・・」

「ううん。ウエディングドレスが着ればそれで十分・・・」

「じゃあさ、その方向で色々調べて準備しよう」

「ええ。私、数カ月前まで結婚なんて無理って諦めてたから、まるで夢を見ているみたい・・・」

「俺もさ、こんなかわいい奥さんをもらえて、夢みたい気分・・・」

お互い顔を見合わせて微笑み合った。

* * * * *

・・・季節は12月・・・。

真帆が初めて店に来店して、出会ってから半年だ・・・。
店舗兼住宅の方は、メーカも決まって、大体形も決まって来年春ぐらいには着工のメドが立ってきた。

それまでの間、純哉はフラワーショップでアルバイトを始める事にした。

ホスト時代に貯めたお金がかなりの額あるので、生活的には全く問題ないが、店オープンまでは時間がかかるので、店舗オープンの時の研修のようなつもりと、流行や客層のリサーチなども兼ねてバイトする事にした。

純哉のバイト先は新橋なので、真帆の務める浅草橋までは都営浅草線で10分。

仕事の後のアフターは、真帆と一緒に食事したり家に帰ったりも多かった。

幸せいっぱいな純哉だが、最近ちょっと気掛かりもあった。

真帆は水曜日は仕事がいとも早番で、仕事が終わるのも早いのに、水曜日は一人気晴らしに自分の時間を楽しむ日にしたいと、純哉と一緒に食事したり、出歩くのも嫌がるし、帰宅時間も結構遅い・・・。
どこで何をしているのか？とても気になる・・・。

どこに行ったのかも話してくれないし・・・。
一人の時間も持たせてあげたいし、束縛してはいないと思うし、自由にさせてあげたいと思い、我慢しているが、実はとても気になつてしょうがなかった・・・。

「今日は水曜日だから、真帆の帰宅も遅いし、俺もまっすぐ帰らないで、ちよつとプラプラ出かけるか・・・。」

純哉はちよつと専門書が欲しくなつて、丸の内の大きな本屋に行くことにした。

新橋から、運動も兼ねて歩いていく事に．．。

本屋に結構長い時間居たなと思いつながら、店を出て、歩き始めた時だった．．．。

大きな幹線道路の対面側の歩道を何気なく見たら、真帆を見つけた．．。

しかも、楽しそうに喋りながら男と歩いている．．。

『うそつー!!』と思った．．。

その男は、背が高く目立つ。

そして、明るい茶髪でホス盛りヘアで、着ている物もホストっぽい。

目を凝らしてみると、その男、知ってる奴だ。

自分の務めていたホストクラブのナンバーツーだった聖だ。

純哉が店を辞めて、今は聖がナンバーワンだ．．。

真帆と聖のツーショットを発見して『ありえねえーっ』と心の中で雄叫びをあげた。

真帆はホスト好き?! 俺が店辞めて、普通っぽい格好に変化して、まさか飽きられてしまったのか???

そして二人は、ワンコインのパーキングに入って行って、聖のど派手な外車に乗って、出て行った．．。

『ガーン!!』

頭の中で大きな音が鳴った．．。

メチャクチャ落ち込んで、トボトボと家に帰って行った．．。

マンション自宅に付いたら、もう真帆は家に帰っていた。

くっそう．．。聖に家まで送って貰ったのか。

「ただいま」

テンションの低い声で玄関ドアを開けて、家上がった。

「お帰りなさい。今日はなんだか元気ないみたい……。何かあったの？ ご飯は食べた？」

「まだ……」

「急いで作るから、待っててね」

「うん……」

何事も無かったような真帆の様子に、心の中はグチャグチャだ。

純哉のテンションの低さに、真帆が心配顔になって覗き込む。

「本当に元気がないけど、どうしちゃったの？ 店で何か大失敗しちゃったとか？」

「いや」

「具合が悪いとか？」

「いや」

純哉がいきなり真帆に抱きついて真帆がビックリする。

「きゃっ！」

「なあ。俺がホストやめてどう思う？」

「え？ どうって……」

「ホストっぽい格好もやめたし、店も辞めて、魅力なくなっただ？」

「うん。どんな格好してても純哉は純哉だし、あなたの外見もとても素敵だけど、一番は、あなたの中身に惚れて一緒になったのだから、あなたの中身が一番好き。だから、格好はあまり関係ないけど．．．。」

それにどちらかと言うと、今の方が私の好み．．．。勿論どんな格好しても嫌いにはならないけど．．．。どちらかと言えば、今の方が私の好み．．．。」

「本当？」

「うん。何で突然そんな事言うの？ 今日の純哉は変ね」
まるつきり見当が付かない真帆。

「おれさ．．．。今日見ちまったんだよ」

「何が？」

「おまえがさ、聖と一緒に楽しそうに歩いているの．．．。そんなもってさ、聖の車に乗り込むのも見た」

「ああ、あれ？ 見ちゃった？」

悪びれもせず、あっけらかんと返事をする真帆．．．。
真帆は本当は善人ぶった悪魔なのか？

(第10話に続く)

第10話 疑心暗鬼と絶妙なバランス

真帆と聖のツーショットを見た事を話したが、あまり驚いた様子でもない真帆……。

「もしかして丸の内？」

「うん」

「見られちゃったのね」

その一言には衝撃を受ける……。

その一言で終わりかよ……。他に何か言っ事ないのかよ……。今の一言で気持ちが引いてしまって、抱きしめた手をゆるめて真帆から少し離れた。

「聖と付き合ってるのか？」

「まさか!?!」

「偶然会ったの……」

ありきたりな言い訳だぜ。

「仲良さそうに見えたけど……」

「仲は悪くないと思う……。良いお友達っていう感じかしら？」

「いつから友達になっただよ」

「どのぐらいだろう．．．。半月前ぐらいかな？」

「ない」

真帆が水曜日には自分の時間にしたいと別行動し始めた頃と合致する。

「俺と言う夫がいながら他の男と友達になるなんて酷いじゃないか」

「え？」

「え？じゃないだろう．．．」

「結婚したら、男の人とはお友達になつてはいけないの？」

「当たり前だ．．．」

「だって知っている人だし、ただのお友達よ」

「でもダメ！」

「純哉つて案外焼きもち焼なのね」

「そう。もう聖と口聞くなよ。車に乗るなよ」

「純哉が嫌そうだから、車に乗るのはやめるね。でも口聞かないのは出来ないと思う．．．」

「なんだと！！」

声が荒げる。

「そんなに怒らなくても．．．。影虎さんともお友達だし、他にも

ピュアの人数人ともお友達よ．．．」

「なんでー！！まさかホスト遊びしてんの？」
声が裏返る純哉。

「まさかーっ。純哉の退職の日以来お店に行っていないし．．．」

「なんで、どこで会ったんだよ」

「スクールで．．．」

「え？」

「あれ？ 丸の内のスクールから出てきたのを見かけたのじゃないの？」

「なに？それ．．．??？」

「あらら．．．」

「何があららだよ！！」

「丸の内フラワースクール．．．。私ね、ほんの少しでも純哉のお役に立ちたいなと思ってね、フラワーアレンジを習ってるの．．．。

初めね、丸黒サングラスに、茶髪で黒ジャケットに、花とは無縁そうな派手な人が居て、ちょっとこわーいって思ったの．．．。そうしたら『真帆さん』って声かけられて．．．。『ヒエーッ！』って思ったら、聖さんだったの．．．。

驚いたわ．．．。

聖さんもそろそろ店辞めようかと思ってらしくて、純哉の店で雇って欲しいとか言ってるわ。

で、あの送別会の時、純哉がお花の資格を持ってないと雇わないって言うてたでしょう？

本気で習う事にしたみたい．．．。

影虎さんと、他にも数人．．．。皆一生懸命頑張ってるのよ」

「ええええつ」

目が点の純哉。

「だから浮気してないし、タダのクラスメートなの」

「なーんだ」

「分かっていただけでしたか？ 焼きもち焼のご主人様．．．」

「真帆も黙ってるから悪いんだぞ」

「ごめんなさいね。あとで驚かそうとサプライズの予定だったのだから、やっぱり難しいわよね。」

「ばれちゃったついでに、月曜日の早番の日も、生け花習いたいのだけれど．．．。いい？」

「ええええつ。淋しすぎる．．．」

「だって、純哉の役に立ちたいし、お手伝いしたいし．．．」

「そう言われると弱いが．．．。」

「でも、週2日は淋しいよ」

「家に帰ったらいつも一緒じゃない・・・」

「それに周りに変な男共がいつぱいいるし・・・」

「あらーっ。それは失礼じゃない？ 皆優しくていい人達よ」

「あいつらの真の姿を知らないからな。」

あいつらが危険なのは十分分かってるからなあ。俺がそうだったし
「・・・」

「え？ そうなの？」

怪訝そうな目で真帆が見る。

「い・いや、冗談!!」

「危険人物なの？」

益々不審そうな顔をして純哉の顔を覗き込む真帆。

「いや、とても安全・・・」

「ふふふ・・・。冗談！ ちょっと嬉しいな」

「何がー」

「焼きもち焼いてくれて・・・」

「えっ？」

「ピユアでナンバーワンホストだった、あの霧夜様が、私に焼きもち妬くなんて．．．。凄く出世したような．．．。変な気分．．．。恋愛経験なかったし、焼きもち妬かれるなんて初めて．．．。」

「俺メチャクチャ疲れた．．．。そんな危険な環境に真帆を置いておくのはかなり心配だ．．．。俺も一緒に習いに行く」

「ええつ。純哉は、資格持ってるし習う必要ないと思うのに」

「いいや。真帆のボディガードだ」

「じゃあ月曜日は一緒に、生け花教室に行く？」

「よし。それなら習っていいよ」

「うん」

「こんな時間になっちゃったし、食べに行こうか？」

「うん」

* * * * *

二人で近所のダイニングレストランに出かけた。

このお店は、洋風建物とインテリアが御洒落な、お鍋料理のお店。

席に座って、お鍋をつつきながら、二人で焼酎を飲む。

「焼酎初体験だけど、結構美味しいね。体にスーッと入ってホット

になる感じ・・・」

「だろ。でもさ度数高いから気をつけろよ。少しずつ飲めよ」

「うん。でもね、貴方と一緒にだと酔っちゃっても安心して気持ち
」

「危険だぞ!!」

真帆が酔いも回って、頬をピンクに染めて、にっこり笑う。

「一緒にお鍋をつつくのも楽しいね。純哉と一緒に過ごすようになったから、毎日楽しい事が溢れてる感じで、とても楽しいの。世の中が幸せで満ちあふれてる感じ・・・」

「そうか?」

嬉しそうに微笑む純哉。

「そうやってさ、酔いが回ってピンク色の頬の真帆ってさ、妖艶と言っか、色っぽくっていいな」

「純哉も、焼酎飲むその雰囲気大人の男性って感じで素敵・・・」

お店の帰り道は、酔いが回りすぎて千鳥足の真帆を、純哉がおぶった。

「だからさー、気をつけろって言ったのに」

「頭はハッキリしているのに、足が言うこと聞かないんだもん」

「しょうがねーなあ」

「でも、おんぶされるって何か幸せ……。子供の時おんぶしてもらった思い出もないし……。何か体温が伝わって心も温まる感じ」

「俺もさー。真帆の体温が伝わってさ、何かいい感じ……。人のぬくもりってさー。いいね」

「うん。凄く幸せ……」

「これからも、この先も、ずっと一緒にいような」

「うん。約束だよ」

「うん。約束な」

吐く息も真っ白になるぐらい寒い冬の夜、だけど二人の心は幸せで溢れている。

「ねえ冬の空って澄んでいて綺麗だね」

「ほんとだな。あまり改めて夜空を見た事なんて無かったからさー。新鮮って気持ち。月がきれいだな」

「うん。満月から少し欠けてるね」

「本当だな」

「ねえ、愛する人が側にいて、温かな帰る家があるって、とても幸せで嬉しいわね。」

昔はね、家に帰るのが楽しくなくて、母と顔を合わせるのも側にい

るのも嫌だなあーっていつも思ってたの。

そんな自分に罪悪感を持ちながら、私を自分の思い通りに管理しようとして、楽しみや喜びを奪ってしまう母が嫌いで……。一人の時間が一番幸せで、嬉しかった……」

「真帆はだから自分の時間を持ちたがるの？」

「ううん。水曜日はあなたを驚かせようと思っただけ。」

今は一人より、純哉と二人でいる時間の方がとても楽しいよ……」

「俺はさー、ずっと独りぼっちだったからさー。一人は嫌いなんだよな」

「分かる気がする……。純哉って寂しがり屋よね」

「そうなんだ。だからさ、いつも側にいてくれよな」

「うん。分かった。必要とされるのってとても嬉しいわ」

「俺達ってさ、ピッタリなカップルだろ」

「うん、本当ね」

お互いに伝わり合う体温に幸福感と心地よさを感じながら、家路についた。

* * * * *

純哉のバイト先の花屋は、年中無休で、交代で週二日休みをとって
いて、純哉は、火・木が休み。

真帆は、店の定休日が日曜日で、それ以外に交代で週1日休みをとっていて、毎木曜日にとっている。

今日は日曜日．．．。

純哉は出勤で、真帆は休み。

花屋の12月は結構稼ぎ時で忙しい．．．。

クリスマス用のアレンジや、ポインセチア、シクラメンなど季節の鉢植えや、バラなども良く売れるし．．．。

純哉も残業続き．．．。

今日も残業で、真帆に帰る時間が遅くなると電話を入れた。

「家に帰るの10時過ぎだと思うから、待たないで先に食事してていいからね．．．。」

そう言うといつもの様に．．．。

「うん、わかった。いつもご苦労様．．．。毎日忙しくて大変そうね。体が心配だわ．．．。帰り気をつけてね」

と返事が返って来るけれど．．．。

家に帰ると．．．。

「また待っててくれたの？先に食事していいのに．．．。」

「だって一人で食事は淋しくて．．．。おなかが減るぐらい大した事じゃないし．．．。一緒に食事したいの．．．。」

先に食事して欲しい気持ちと、いつも待っていてくれる．．．。そんな彼女がいじらしくて、愛らしくて、可愛い気持ちが交差する。

俺の穏やかな平穏な時間が流れる．．．。

俺の手を見て、真帆が心配そうな顔をする。

「随分手が荒れちゃってるね。薬局で聞いて、良いハンドクリーム買ってきたから、つけてみて」

「うん」

「どうお？」

そう言って、ほほ笑みかける彼女の顔がとても可愛い……。

「ジツと見てどうしたの？ 何か顔についてる？」

「顔に目が二つついている……」

「……」

啞然とした顔の真帆……。そのあとコロコロ笑うのがまた可愛い……。

「真帆の事が可愛くて、つい見とれちゃうんだよな」

「恥ずかしすぎるわ……そんな見とれる顔じゃないし……」

「俺にとっては世界一なんだよな」

「嬉しい……。私ね、母からいつも貶されてばかりで育ったから、とつても”みにくいアヒルの子”だって思ってた、自分の容姿に自信が無くて、その上お洒落もさせてもらえなかったから、更に、人から見たら目を背けたくなるような、とても酷い姿してるのだろうなって、いつも穴に入りたい、消えちゃいたいって思い続けてたの。それに、太っていたし……」

「確かに、真帆を初めて見た時にはインパクト強かったよ。だけど

ね、あの時の真帆もなんか引き寄せられるような魅力があったんだよな．．．。俺、一目惚れしてたのかも．．．。」

「え？ あんな酷い格好してた私が？」

「確かに、昭和初期の映画から現れた人かって思ったけど、よくよく見ると可愛いなって感じてた．．．。

あの時はさ、クラブナンバーワンの妙なプライドがあったからさ、そんな自分を認めたくなかつたんだけど．．．。すぐにそんなものは何処かに飛んで行ってしまったよ。」

もっと自分に自信持っていいんだよ。」

瞳が澄んでいて目が大きくてまつ毛が長くてさ、色白で肌がきれいで頬が薄ピンクでさ、鼻筋が通って彫りも深いし．．．。どこから見ても綺麗だよ。」

最近服装や化粧も洗練されてさ．．．。

俺が初めに見付けた宝石の原石なのに、とられないかって冷や冷やしてるんだよね。」

「ありがとう．．．。私ね、純哉の言葉にいつも勇気を貰ってるの。昔は人がとても恐くて知らない人が隣に座るだけで落ち着かなくて恐かったけれど、最近は大丈夫になってきたし．．．。最近は、私もみんなと同じなんだよね、変じゃないよねって自信も出来て来たわ。」

「うんうん。自信持って！！」

「元気が湧くわ。いつも元気のエネルギーをありがとう．．．。」

「俺こそ、いつも俺の心を暖めてくれて、優しくしてくれてありがとう……」

真帆の心は純哉が温めて、純哉の心は真帆が温めて、二人支え合っていて、絶妙な心のバランスがとれてる二人だった……。

(第11話に続く)

第11話 二人で重ねていく思い出

今日は、純哉と真帆の共通の休日である木曜日。

クリスマスも押し迫って、町中賑やかで慌ただしい雰囲気は漂っているが、そんな中、今日は1日ばかりでブライダルフォト撮影の予定。

結婚式は翌年スイスの古城の中のチャペルで。二人だけの結婚式を挙げる事にした。

だが、七五三も成人式の写真もない真帆を喜ばせてあげたいと、純哉が和装の花嫁衣装を着せてあげたいと思い、ブライダルフォトを思い付いた。

それに真帆の素敵な花嫁姿を是非見てみたい……。

あれこれプランをねって、いざ予約となったら、あれもこれも着せてみたくなくて、結局、古い洋館とチャペルでのウェディングドレスとカラードレス撮影に、大きな神社での白無垢と日本庭園での色打ちかけ……。

まだまだ着せたい衝動に駆られるが……。
ぐっと我慢で、それでもかなりの盛りたくさんスケジュールとなった。

あまり楽しい思い出もない、写真もあまり無い、真帆……。
これから二人で沢山、楽しい思い出のアルバムを増やしてあげたいと思った。

初めは洋館で、カラードレス……。
ドレスは上品でクラシカルなAラインに美しい銀系の刺繍が施されたドレス。

純哉が結婚後に気がついたが、真帆のバストは大きくてとても魅力的……。

そこを強調出来るように、と言うか、純哉の好みで、上品に胸元がほんの少し開いた、デザイン……。

色は真帆が、純哉の好きな画家フェルメールの愛した青ウルトラマリンブルーにきめた。

どぎつすぎる濃いブルーではなくて、上品な少し淡めのブルーだ。

ウルトラマリンの顔料はラピスラズリを砕いて作った高価な顔料だ。気品ある凜とした端正な顔の純哉のイメージにもマツチする。

純哉は淡いウルトラマリンブルー色のタキシードにした。

一見淡いグレーのように見えるぐらいの、上品な色合いだ。

髪をアップにして、ウルトラマリンブルーのシフォン地のバラの花の髪飾りに、胸元に輝くアンティークで豪華なラインストーンネックレスとお揃いのイヤリング……。

ドレスに着替えた真帆を見て純哉は胸が高鳴った。

まるで貴婦人の様に美しく気品が漂い愛らしい……。

そして、俺の思った通りだとその姿に満足した。

真帆は真帆で、まるで物語に出て来そうな王子様の様な素敵な純哉にすっかり見惚れてしまった。

「凄く綺麗で心臓バクバクしてるよ」

「純哉だって、凄く素敵……」

お互いにアイコンタクトを送って微笑み合う。

「今日は夢のようだわ。こんなに色々素敵な衣装が着れて……」

嬉しすぎて、舞い上がって何処かへ飛んで行ってしまいそう．．．」

「本当に飛んでいくなよな。喜んでくれて嬉しいぜ」

「もうね、最高．．．。いつでも最高で幸せだけれど、今日は極上．．．」

「そうか？ 俺もさ、今日は色々な美しい真帆を堪能出来るから、最高に楽しみ．．．」

カラードレスが終って、次はウェディングドレス．．．。ビスチェ部分には美しい刺繍レースがたっぷり施され、Aラインのドレス部分はシンプルスタイルだがたつぷりのオーガンジーがふんわり流れるようなデザイン。

後ろから裾にかけてのオーガンジーのドレープは、淡い白バラの花びらが優しく重なり合うような感じだ
純哉は上品なグレーのタキシード。

場所を移動して、ステンドグラスの美しい、ゴシック調の教会を借りて撮影．．．。

ウェディングドレス姿の真帆はまるで、天使か？と思えるぐらい幻想的で美しい．．．。

「いやあ、カラードレスも良いけど、ウェディングドレスも良いなあ．．．。どちらも良いな」

「純哉だって、グレーのタキシードも素敵．．．。見惚れてしまうわ」

「スイスでもう一回真帆のウェディングドレス姿が見れるから、ま

た楽しみだな。何度見ても良いな。
毎年着るか？」

「いやあ．．．。それは．．．。」

苦笑する真帆。

「憧れのウエディングドレスが着れて、嬉しいわ。幸せ．．．。夢
じゃないよね」

「夢かもな」

イタズラっぽく笑う純哉。

純哉と結婚して、毎日夢のような日々だけれど、今日は格別に幸せ
が実感出来ないぐらい幸せ気分の真帆だ。

私がウエディングドレスを着てるなんて．．．。

こんな素敵な人が私の旦那様．．．。一生この夢よ冷めないで．．
。

そして、午後から大きな神社にて、白無垢と綿帽子．．．。

正絹に老松流水花車に鶴の織柄．．．。

ナイロンの着物は一見ピカピカして豪華そうに見えるが、正絹は、
上品な光沢があり、日本人の肌にとっても生える。

重厚感もある。

お値段は張るが、純哉の強い勧めもあり、この着物にした。

ふき（綿の入った着物の裾部分）は銀糸正絹．．．。

色白の真帆は真っ白の白無垢と、化粧の赤い紅がとても似合う．．
。

「和装の真帆を初めて見たが、すごくいいな」
目を輝かせ、何度も見惚れまくる純哉。

「純哉も着物がとても似合うのね。凄く素敵・・・」
凛々しい着物姿の純哉に、真帆もうつとり見惚れる。

場所を変えて、庭園にて真帆は色打ちかけに着替えて撮影・・・。

目の覚めるような鮮やかな赤地の絹に、絢爛豪華な四季を彩る色とりどりの花がちりばめられた「花車」があしらわれてた、吉祥文様豪華な着物に色白で赤い紅の真帆は本当に似合う・・・。
日本髪にしても美しい・・・。

『初めて見た時に俺が見つけたかわいい芋虫が、こんなに美しかったなんて・・・』
純哉は美しい音楽を聞いて心が沸き上るような気持ちだった。

「これで撮影も終わりね。着物を脱がなくてはいけないのが少し淋しいような、写真が出来上がるのが楽しみのような・・・。ほっとした様な・・・」
真帆が頬を染めて、純哉に笑いかける。

「いや・・・。まだもう1着あるんだ」

「えっ?」

純哉に手を引かれ、一緒に控室へ・・・。
そして控室のテーブルには、大きな藤色のちりめんの風呂敷包みがひとつ・・・。

「これは?」

「これは俺からのプレゼント。開けてみて」

「何かしら？」
包みを開けたら、上品な緋色、牡丹色、狐色……。和の古典色を多彩に使った、総絞りの牡丹柄の、古典振り袖が出てきた。金糸銀糸の刺し刺繍もあしらって、とても豪華だ……。それに合わせて非常に美しい西陣織の袋帯や、一色も入ってる。

「……………」
あまりにも美しすぎて、声も出ず、真帆は口を押さえて固まってしまった。

それからポロポロ泣き始めた。

「その……。気に入らなかったかな？」
不安そうに覗き込む純哉。

「ううん。あまりにも美しすぎて、嬉しすぎて……………」

「じゃあ気に入ってくれた？」

「ええ。とつても……。こんな素晴らしいプレゼント貰っていいのか……………」

「いいの、いいの……。俺一人じゃ分からないから、麻生夫人と一緒に見立てて貰って選んだんだ。
麻生夫人なら着物を見る目も確かだし……。成人式の着物も着れなかった真帆に、着て欲しいんだ」

「ありがとう……。とつても嬉しい……………」

ヘアスタイルは上品に上げて、牡丹の花の髪飾りをつけた。

着物は真帆にとても良く似合って、気品に溢れとても艶やかで美しい。

「なんかさ、牡丹の花の精の様だな．．．。すごくいいよ」

「本当は既婚者だから振り袖は着れないのよね。高かったでしょう？ もう着れなくなるのに．．．。なんか申し訳なくて．．．」

「いいんだ、気にすんな。借り物じゃなくてさ、一着持たせてあげたかったんだ。

今まで出来なかった事を色々させてあげたくてさ．．．。七五三写真だって撮らせてあげたい気持ちなんだから．．．」

「それはちよつとね．．．」

お互いに顔を見合わせて笑い合う。

あれから、ブライダルフォトは、写真スタジオのオーナーがとても気に入り、是非にと頼まれ、大伸ばしした写真数点が、お店ビルのショーウィンドーに飾られる事になった。

その写真がとても好評で、その後、スタジオのホームページにもUPされる事になった。

その宣伝費の謝礼と言う事で、あれだけ高価な衣装を着て一日がかりで撮影したのに、大幅にサービスしてもらい、純哉が真帆にプレゼントした振り袖一式の値段分、浮く事になった．．．。

またアルバム仕様も最高級品に変更してくれた。

「いやあ、こんなに値引きされて恐ろしい気分だな．．．」

「本当ね・・・」

「でもさ、仕上がった写真・・・。なかなか良いよね。綺麗にとれてる」

「ううやってさ。二人の思い出を沢山増やしていこうぜ」

「うん。二人の楽しい思い出が積み重なって、大きな山みたいになつていくのがとても楽しみ・・・」

「真帆も写真があまり無いけどさ、俺も親父がドローンしてから大した写真なくてさ、淋しいんだよね。」

「だからアルバムを増やしたい願望強いかも・・・。これから毎年フォトスタジオに写真とりに行かないかい？」

「私もアルバム増やしたい願望強いし大賛成!!」

「新婚旅行でも沢山撮ろうな」

「うん」

それから真帆と純哉のブライダルフォトは、スタジオに来るお客様にも、ネット閲覧者にも大好評で、ほんの短時間だが、ついにテレビCMにも起用される事になり、翌年、また新たに撮影し直し、更にモデル出演料と言う事で、ちょっとした額の出演料も出て、結局フォトスタジオに支払った額が浮くだけでなく、利益まで出て、結果としてプラス マイナス プラスになった。

* * * * *

そんなある日の事だった．．．。
フォトスタジオから純哉に電話が入った。

その内容は、偶然CMを見た、真帆の父親からの問い合わせだった．．．。

真帆が高校を卒業してから両親は離婚して、それ以来一度も会っていない。

両親離婚後、慰謝料代わりに父が置いて行った、幼い頃からずっと住んできた家で、母と二人ずつと暮らしてきたので、連絡をとる機会は何度でもあった。

だが、父からは何も連絡が無かった。

父方の親類から、その後父が再婚したようには聞いていたが．．．。どこに引越したのかも知らない状態だった。

純哉から父の事を聞いて、真帆は物凄く動揺している感じで、テーブルの上にあったマグカップをひっくり返してこぼした。

「あっ」

「大丈夫か？火傷しなかったか？」

「うん。ゴメンね」

そう言って慌てて、台ぶきんでテーブルを拭いた。

「なんか用があるようなんだけどさ、嫌だろうし、俺が会って、用件を聞いてこようか？」

「このまま無視してても、真帆の事を探そうとするかもしれないし．．．」

「ごめんね。私、絶対に父に会いたくないし、許せない気持ちを抱いてて……。」

嫌悪感の塊になってるし、何で今ごろ連絡してくるのかしら……」

「俺が聞いてくるよ。訳の分かんない事言ってきたら、ガツンと言つてやるからさ」

「ありがとう……。面倒かけちゃってごめんなさいね」

「いいんだよ。気にすんな」

「うん……」

純哉は色々事情がある事を話して、こちら側の住まいや自宅連絡先などは一切知らせないように、スタジオに頼んだ。

そして、純哉の携帯番号だけ真帆の父親に伝えるように頼んだ。

暫くしてから、真帆の父親から純哉の携帯に電話がかかって来た。

真帆の父親はやはり再婚して、再婚相手の大学生になる男の子と高校生になる女の子の連れ子と3人で暮らしているそうだった。

銀行は定年退職して、別の会社に派遣で働いているとの事だった。

純哉は真帆の父親とカフェで会う事になった。

約束のカフェに行つて、指定されたテーブルの辺りを見たら、年配の男性が腰かけていた。

長年銀行を務めていた風情で、頑固そうな堅そうな紳士と言った感じだ。

真帆にあんな事をする人物にはパツと見た感じでは見えない……。だが、油断はならない……。

大抵は、親の面影が子にあるものだが、真帆の優しい柔らかな顔と、父親の堅牢そうな顔には共通点が浮かんでこない。真帆は母親によく似た顔なのだろうか？

内心父親に似なくて良かったように、ふと思った。

「あの．．．。佐倉崎さんですか？」

「久世さんですか？」

「はい。真帆の夫の久世純哉です」

「初めまして、佐倉崎です。真帆が結婚していたと知って、驚いてます。どうぞ座ってください」

物腰も低く、到って普通っぽい人だ．．．。

その猫を被っている真帆の父親が口を開いた。

「実は、真帆に伝言があつて．．．」

「色々な事情は真帆から聞いてますし、真帆は絶対に会いたくないと言ってますので、私が代理でここに来ました。

伝言は私に言ってください。真帆に伝えますから．．．」

ちよつと物憂げな表情をして、真帆の父親はゆっくり口を開いた。

「久世さんは、真帆から私の事など、色々話を聞いているのでしょうか？」

「はい。性的虐待の事も．．．。」

純哉は相手がどう出るか、仕掛けてみた。

その言葉を聞いて、真帆の父親が非常に驚いた顔をして、目を見開いた。

それから悲し気な顔をして、うつむき加減に目を伏せて、話しを続けた。

「そんな事まで．．．。本当に、あの時の私は最低の人間でした．．．」

なかなか言い出せない感じに一瞬言葉が途切れ、それからまた決心した様に純哉を真直ぐ見て、話しを続けた。

「真帆は、私が本当の父親だと思ってると思いますが、実は、私は本当の父親ではありません。」

真帆は、美和が．．．。真帆の母親の名前は美和と言いますが、美和が浮気して出来た子なんです」

「え．．．．」

驚く純哉。

(第12話に続く)

第12話 父と娘

真帆の父親から、本当の父ではないと聞いて、純哉は非常に驚いた。

「驚かれたと思いますが．．．」。

つい先日、隆昭から．．．隆昭は真帆の兄ですが、隆昭から美和が昨年4月に心室性不整脈で突然逝ってしまった事を聞いて、隆昭が遺産全てを独り占めして真帆をあの家から追い出して、行方が分からなくなつた事を知つて、ずっと探してました。

父親こそ違え、血の繋がつた兄なのに、隆昭が真帆にあんな酷い事をしたのは、私と美和の責任もあると思いますし、隆昭がいつ知つたのかは分かりませんが、何かのきっかけで、真帆が父親の違う子だという事を知つて、ねじ曲つてしまった子になってしまったんだと思います。

私も美和に騙され、ずっと自分の娘だと思つて可愛がつてきました。が、真帆が小学2年の時に、何気ない事で、血液型が不一致だと言ふ事を知つて．．．。

私も美和も血液型がB型ですが、真帆はA型．．．。両親がB型の場合は、A型の子は生まれて来ない．．．。

その事を美和に問い詰めて、よそで作つた子だと言ふ事が分かりました。

その頃からです、真帆に卑劣な嫌がらせをして、それとなく美和に見せつけて、2人を苦しめてやろうとし始めて．．．。

それ以前から、美和は何故か真帆の事を毛嫌いして、可愛がらずに．．．。

自分の子だと思つていた頃は、私が補うように真帆の事を可愛がっ

てましたが、事実を知ってからは、私まで……。本当に可愛そうな環境で育った子でした」

純哉は驚く事を聞かされて、なにも言葉が出て来ないような状況だったが、それ以上に、何を目的で自分を呼び出したのかと伺うような気持ちで真帆の父をジッと見つめていた。

純哉の心の中を見透かすように、真帆の父親が純哉の聞きたい事を話し始めた。

「ご安心下さい、金銭とかそういう事で呼び出したのではなくて、多分もう真帆と関わる事も、会う事もないと思うのですが、真実を話しておいた方がいいだろうと思って、お呼びしました」

そう言っただけで真帆の父は、自分のカバンから両手にすっぽり収まるぐらいの、小さな木彫りの宝石箱を出して、渡した。

中には古びた名刺と、18Kのネックレスチェーンに通された、男物の指輪が出てきた。

指輪は、ネイティブアメリカンアーティストが作ったインディアンジュエリーで、厚手の18K台側に、祈りの儀式に使うブレイヤーフェザーとレインクラウドのモチーフが掘り込まれ、トップには、微妙な青のグラデーションで、チャイニーズ・ターコイズ、ラピス・ラズリ、クリソプレーズの石がはめ込まれている、とても美しいものだった。

名刺は、ホストクラブの名刺だ……。

六本木 『club インディアンフルート』

樹龍 結弦 (きりゆう ゆずる)

「真帆の父親は六本木のこの店にいた、樹龍 結弦という名のホストらしいです。」

この店はかなり昔に無くなってしまってますが……。

それから、この指輪はその人から貰った物のようで、美和は亡くなるまでずっと大切に持ち続けてたようです。

最近になって、隆昭がこれを持って私を訪ねてきました。

私は全く気づかなかったのですが、おそらくこの店に入り浸って、この名刺の男性に夢中になって、真帆を身ごもったのでないかと思っています」

純哉は見えない運命の糸を感じた。

真帆はあの日、見えない力のような、何かに引き寄せられて、六本木のホストクラブにやって来たのだろうか……。

「この事を真帆に話すかどうかは、久世さんにお任せします。」

血は繋がってませんが、再婚して家内の連れ子の二人の子供達と幸せに暮らして、血のつながりとかそう言うものは大して重要じゃないような事に気がついて、真帆の事がずっと気掛かりで、申し訳なさでいっぱいでした。

謝った所で許されるものではありませんが……。

美和が真帆にあんな態度をとったのは、その男に捨てられた恨みを真帆にぶつけていたのではないかと感じてます。

反対に自分の手元から離さなかったのは、真帆にその男の姿を重ねていたのではと思います。

美和は最後まであの男の事を愛していたんだと思います。

真帆は可愛そうな育ち方をして来ました。
これも皆私と、美和の責任だと思ってます。

真帆があまりにも変わったので、隆昭は気づきませんでした。美和に生き写しのようなだったので、私はTVコマーシャルを見てすぐに真帆だと気づきました。

それからフォトスタジオに行つて、ショーウィンドーに飾られている写真を見て、今はとても幸せなんだなと感じました。こんな事を言える立場ではありませんが、久世さん、どうか真帆の事を頼みます」

真帆の父親は、深々と頭を下げて帰って行った。

初めは警戒心でピリピリした気持ちで真帆の父親の事を見ていたが、今では普通の父親として、幸せに暮らしているのだと言う事が分かった。

それにしても可愛そうな真帆・・・。

なにも罪が無いのに、辛い生き方をして来たんだな・・・。

この事実を話して良い物だろうか・・・。

どうすればいいのかと思ひ悩み、純哉は暫くの間、そのままカフェで時を過ごした。

* * * * *

家に帰つて来たら、真帆が不安そうな顔で純哉の顔を覗き込む。

「おかえりなさい・・・」

「ただいま」

「今日は私の事で面倒かけてしまって、ごめんなさいね」

「いいんだ」

お互いに、阿吽の呼吸で、ダイニングテーブルの椅子に腰かける。

「お茶入れるね」

「ああ」

真帆の入れた紅茶をお互いに一口飲んでから、純哉が口を開いた。

「なあ、もしさ、真帆の父親が本当の父親じゃなかったとしたら辛
いかな？」

その一言で真帆は大まかではあるが、父親が何を伝えようとしたの
かを悟った。

「辛くないと言ったら嘘になるけれど、それでも事実が知りたいわ。
私の事は気にしないで、全てを話して欲しいな」

「俺はさ、今もこの先もずっと真帆の見方だからさ、色々相談にの
るしさ。辛い時には何でも話してくれよ」

「うん。ずっと純哉の事を頼りにしてるし、愛してるし、ずっと変
わらないから・・・」

純哉は真帆の父親から聞いた話しを伝えて、受け取った小さな木彫
りの宝石箱を渡した。

真帆はとても驚いた顔をしたが、一生懸命その事実を受け入れようとしている感じだった。

純哉は真帆の手の上に自分の手を重ねた。

「辛い話だと思うけど、おれはずっと真帆の側にいて支えようと思っし、力になるから」

「ありがとう……。純哉と出会う前にこの事を知っていたら、取り乱してしまっていたかもしれないし、絶望してどうなっていたかと恐ろしくなるけど、側にあなたがいてくれて、そして、30代と言っ年齢の今だから、耐えられる気がするの」

「もし本当の父親を探したいんなら、協力するから。真帆はどうしたい？」

「その人にはなにも望まないけれど、正直、どんな人なのか、一目見てみたい気持ちはあるの。」

「一目見たら、気持ちに区切りがつくような気がするわ」

「その名刺の店はもうすでに無いし、その名前は源氏名だから探すのは容易じゃないと思うけれど、俺、協力するから」

「あなたの負担にならない程度で良いからね。お店の準備もあるし」

「ああ、大丈夫だから……」

「本当にありがとう……。純哉が側にいてくれて良かった。私、とても大きな力であなたに支えられてるの」

「うん。俺さ、思ったんだけど、真帆の母さんは、真帆の本当の父さんの事、ずっと愛し続けてたんだろうなって思ったよ。この名刺と指輪を大事に持ってたんだからさ。」

真帆のお兄さんが、遺品の整理をして、この宝石箱を見つけたらしい。

何かいわく付きのようだったし、男物の指輪がはいっていたから父親に聞こうと思って、会いに来たらしい。。。

お兄さんは、真帆の父親と、時々連絡をとっていたみたいだね」

「お兄ちゃんは実の父だし、時々会っていたのね。」

お母さんは、ずっと私の本当のお父さんの事、思いつづけていたのね。。。

例え、私の事を嫌って憎んでいたとしても、その事があれば救われる気がするわ。

愛する人と結ばれて、私は生まれてきたのよね」

「そつだよ。それからさ、俺は物凄く感謝してるんだ」

「何を？」

「真帆がこの世の中に生まれて来てくれた事だよ。生まれてきてくれて、俺の側にいてくれて、ありがとう真帆」

その言葉を聞いて真帆は泣き出した。

久し振りにみる真帆の涙。。。

「何で泣くんだよ」

「だって嬉しすぎる言葉だもの」

純哉はぎゅうつと真帆の事を抱きしめた。

「真帆の涙はさ、綺麗だな．．．」

そう言つて、そつと指で真帆の涙をぬぐつた。

「純哉．．．」

どんな辛い事でも、純哉がいてくれれば私は耐えられる。

大丈夫！！ 真帆は自分に言い聞かせた。

真帆は、あの金のネックレスに通してある、インディアンジュエリーの指輪をいつも首から下げるようになった。

見た事も会つた事も無い父親だけでも、すぐ側にいる様な気持ちになった。

* * * * *

季節は5月になり、店の設計図も出来上がり、建築工事もはじまつた。

慌ただしい中、真帆と純哉はヨーロッパに新婚旅行と結婚式を挙げに、出発した。

店の建築も始まり、真帆はビーズショップは辞めて、純哉もフラワーショップを辞めて、時間的には余裕が出来たので、旅行は20日間と言う長期の旅行にした。

スイスのルツェルンの古城の中のチャペルでの結婚式は、バレリーナのロマンティックチュチュを連想させるような、チュールレースたつぷりのふんわりしたスカートで、くるぶし辺りの少し短めのスカートのウェディングドレスを着た。これもまた愛らしい．．．

。
 ブライダルフォト撮影してから挙式まで、半年近くの年月が過ぎてしまったが、まだ初々しさは変わらない二人……。

式が終ってルッツエルの町のホテルに戻って来た二人……。

「これで式も終って、やっと夫婦って感じだね」

「私ね、結婚指輪をはめるのを心待ちにしていたの……。嬉しいな」

「俺もやっと、今日から気をつけないでも良いしな……。」
「にやける純哉。」

「何を？」

「ほら、挙式終わってないのにマタニティになっちゃったら真帆が可愛そうだしさ、愛し合う時気を使っていたんだよ」

「まあ……。そうだったの？」
頬を染める真帆。

「もう真帆はこれだからなあ……。でもさ、もう気をつけなくてもいいよね」

「うん」

真っ赤になる真帆。

「俺さ、早くベビー欲しいな」

「うん」

「俺、真帆と夫婦になってからずっと幸せなんだよね。毎日が充実しててさ、嬉しくて、楽しくてさ……」

「私もね同じよ。世の中がね輝いて見えるの」

「この先楽しい事ばかりじゃない時もあるかもしれないけどさ、いつも二人で頑張って生きて行こうな」

「うん。あなたがいてくれれば私どんな事も平気」

それから7月に店は完成し、引っ越しも住んで、オープンとなった。店の名前は『フローラルショップ KIRIYA』。純哉の源氏名だが、思い出の多い名前で、真帆も気に入っている。

純哉のカリスマ性も健在で、店は繁盛した。

特に純哉の開く、フラワーアレンジメント教室は、とても人気が高くすぐに定員に達してしまうほど……。

聖もホストから足を洗って、店を手伝う事になった。

影虎は、結局フラワーアレンジには向いてなく、途中断念したが、バリスタの資格をとって、店のカウンターでと純哉が考えていたミニカフェを担当する事になった。

癒し系で、会話のとても上手な明るいキャラの影虎のカフェも大盛況だった。

元ピュアのカリスマホストだった3人……。

店は女性客でいつも賑わっていた。

出張で花を生ける仕事も増えた。
場所はやはり、六本木のホストクラブが多い。

今日は、真帆と一緒に、純哉の勤め先だった『club ピュア』
のエントランス横の、大理石のコンソールテーブル上の大きな花瓶
と、各テーブルに花を生けに来ていた。

ピュア店長が苦い顔で純哉に話しかける。

「もう霧夜がいなくなってから、店の売上がガタ落ちで、更に聖ま
で辞めちゃったからさ、結構厳しいよ……。また戻ってこないか
？」

「店長、それは勘弁して下さいよ。あの頃は結構体がきつかったし、
今の方が充実して毎日楽しくて……」

「こんな可愛らしい奥さんといつも一緒なら、楽しいだろうね」

「はい。もう……」

「独身のやもめには、キツイなあ……。お前がうらやましいよ」

嬉しそうな純哉の顔に、真帆も幸せを感じる。

店長がエントランスをふと見て、ビシッと緊張した雰囲気が変わり
慌ててエントランス入り口扉を開けた。

「いらっしやませ」

そこには物凄い威圧感のある、凜とした50代の男性が部下を引き
連れて立っていた。

「あの方はどなた？」
真帆がこっそり純哉に聞く。

「この店のオーナーの 柏木 総次郎氏だよ」
純哉も少し緊張した顔になる。

そのオーナーが純哉を見つけ近付いてきた。
「霧夜じゃないか。久し振りだな」

「柏木さん、ご無沙汰しております。その節はお世話になりました」
「フラワーショップついにオープンしたんだってな」

「はいお陰様で……。今日は花を生けに伺っております」
「お前が辞めてから、ピユアは厳しいよ。お前は数ある宝石の中で
も一番グレードの高い宝石だったからな……。お前ほどの貴石は
この先、現れないかもしれないよ」

「はあ……」
困った顔の純哉。

「おや、この子は？」

「家内です」

「おまえ、結婚したのか？」
目が点の柏木。

「はい」

「いやあ、驚いたよ。店辞めたらプツツリで、結婚の知らせもくれないんだから……。冷たいよなあ」
恨みがましく純哉を睨む柏木。

それから真帆を見て、柔らかく優しい笑顔を浮かべる。

「初めまして、ここのオーナーの柏木です。こんな清らかそうで綺麗で素敵な子が霧夜の奥さんだなんて……。驚きだなあ」

「初めまして、その節は主人がお世話になりました」

柏木が真帆の胸に下がるチェーンに通した指輪に目がくぎ付けになる。

「あれ、その指輪……」

「これ？ 最近分かったのですが、父の物らしいんです」

「え？」

「この六本木に 昔、『club インディアンフルート』ってお店があったみたいで、実は、樹龍 結弦と言う人を探してるんです。もしかしたら私の父かも知れないんです」

「君、もしかしてお母さんの名前は 佐倉崎 美和さん？」

「え？ どうしてそれを……」

「私が樹龍 結弦なんです」

「えっ？」

（第13話に続く）

第13話 母の愛した人

真帆は非常に驚いた……。
なかなか見つからないと思っていた、樹龍 結弦と言う人物が自分の目の前にいる。

その人の本名は 柏木 総次郎……。
昨年6月に、真帆がふらりと初めて訪れて、純哉と出会ったこの店のオーナー……。

親子の見えない糸が呼び寄せたのだろうか？ それともただの偶然？

何か話したくても頭が回らなくて、言葉が出てこない……。
見かねて純哉が、柏木に聞く。

「真帆の実際の父親らしいと、真帆の父さんから聞いたのですが、それは本当なんですか？」

「ああ……。そうだと思う」

「柏木さんは血液型はA型ですか？」

「ああ……」

柏木もとても驚いて、固まっていた。

「真帆の両親はB型同士……。真帆はA型……。やはり、オーナーが父親なのか……」
純哉がぼそつと呟く……。

「良ければゆっくり話さないか？」

色々な感情が溢れ出して、気持ちが高揚した雰囲気の中、柏木が座った。

「はい．．．」

真帆はコックリうなづいた。

「霧夜も一緒に．．．」

「はい．．．」

店の奥、従業員スペースの一番奥にある社長室に通された。

社長用の重厚感ある広い高価そうなデスクの前に、豪華な黒革張りの応接セットがあり、天井には豪華なクリスタルシャンデリアが下がっている。

男性的なインテリアで統一されているが、けばけばしくなく、品の良い部屋だった。

黒革張りの長イスに真帆と純哉と並んで座り、向かい側の肘掛椅子に柏木が座った。

マネージャーがコーヒーを持って来て、テーブルに並べた。

「先に私から、美和との事を話しておこうか？」

「はい．．．」

「その後に、聞きたい事を何でも聞いていいから．．．。知ってる事は全て話すよ」

「はい」

「私と美和との出会いは・・・」
柏木は遠い目をして、昔の事をひとつひとつ思い出す様に話し始めた。

美和の母は専業主婦だったが、ずっと両親に甘やかされて育ち、見合い結婚して子供をもうけても、家事も育児も苦手で、真帆の父親と口論が絶えず、あまり幸せな結婚生活ではなかった。

その当時、柏木は、六本木のホストクラブ 『Club インディアンフルーツ』 に務めていた。

その当時の柏木の店での源氏名は、樹龍 結弦 (きりゆう ゆずる)。

ある日、真帆の母は父と大喧嘩して、真帆の兄を連れて家を飛び出し、あても無く東京の町をさまざまに迷っていた・・・。

そして、眠ってしまった2歳児だった真帆の兄を抱っこして、深夜公園のブランコに腰かけて、それをゆらゆら揺らして、遠くのビル群の明かりをポーツと見ていた。

その時店が終って家に帰る途中の柏木と出会った。
近道で、公園の中を帰る所だった。

こんな深夜に若い女性?! 初め幽霊かと思ってギクツとした。
よくよく見たら、小さな子供を連れのおばさん・・・。
無視しようかと思ったが、なんとなく訳ありそうな感じもして、声をかけた。

「おばさん、こんな夜中に公園で何してんの?」

その言葉を聞いて、真帆の母親がムツとした顔をして怒った。

「今おばさんって言った？ あんたみたいなオッサンに、おばさんなんて言われる筋合いはないわよ」

「オッサンは聞き捨てならないな。俺はまだ21歳なんだよ。おばさんは30歳？」

「失礼ねー！！ まだ29歳よ」

「なんだやつはおばさんじゃん」

「うるさいわね、消えろ！！」

「ちえ。心配して声かけて損した」

その時だった……。2歳だった真帆の兄 隆昭が起きて大泣きし始めた。

「もうあんたのせいで、泣いちゃったじゃない。夜泣き激しいし、なかなか泣きやまないのよね」

「え？ 俺のせい？」

「ほら、泣きやむまであんたが抱っこして、あやして」

「嫌だよ、子供なんて抱いた事ないし、苦手だし……」

「ウダウダ言わない！」

そう言っつて、無理矢理柏木に、隆昭を抱かせた。

柏木に抱かれたらピタッと泣きやんだ。

「なかなか可愛いじゃん。でもさ、顔が不細工」

「褒めてるのが貶してるのか……。隆昭は旦那似だから……」

よくよく見るとその女性は、色白で大きな瞳に長いまつ毛、男性を引きつけるような柔らかかなキューピットのような桜貝色の唇。柏木好みのなかなかの美人だった……。

「へえー。そう言えば、おばさんに似たらハンサムだったかもね。残念だな隆昭……」

そう言つて、柏木は隆昭の顔を覗き込んで、ひょうきんな顔をしてあやした。

二人ブランコに並んで腰かけて、お互いにゆらゆらとブランコを揺らしながら会話する。

「おばさんはやめてよ」

「じゃあなんて名前？」

「佐倉崎 美和。あんたは？」

「俺は、結弦あつな」

「へえ。良い名前ね」

美和は柏木からヒョイと隆昭を取り上げて、手慣れた感じで抱っこしながら、楽しそうに目を輝かせた。

「源氏名だしね」

「あなたホスト？」

何か面白そうな事があるぞと言うような、興味津々の顔をして柏木を見る。

「そう、本名は柏木 総次郎・・・」

「うーん。やっぱり源氏名のほうがいいかも・・・。その名前ちょっと渋いわね」

口をキュッと結んで苦笑いする。

「ちえつ。でもさ、美和さんは何でこんなところにいるの？」
その美和の反応につまらなそうにふてくされる。

「旦那と喧嘩して家出」

「ゲゲゲッ。やばいじゃん」
のけ反って、驚く。

「うん」

「行く所ない訳？」

美和に顔をだんだん近づけて、覗き込むように聞き入る。

「うん」

「どっすんのぞ」

「どっししようかな？」

「まさか自殺しないだろうね」

「しちやおうかな．．．」
投げやりにはいたそのセリフに柏木はドキツとした。

「やめろよ縁起でもない．．．」

「ねえ、泊めてよ」

「えええっ」

「私に声かけてきた責任とつてよ」

「えええっ。でもさ、俺ホストだし、男の部屋に泊まるなんて危険すぎだよ」

「フッフ．．．。そんな人には見えないし、あなたはそんな人じゃないわね。」

それに生娘じゃあるまいし、私子連れのおばさんよ。あなたのよ
うな若い子が心時めかせるような対象に入らないし．．．」

「なんだ。自分でおばさんって言うてるじゃん」

「自分で言うのと、人から言われるのじゃ気持ちが違うの！！明日私達親子がここで冷たくなって死んでもいいの？化けて出るわよ」

「そ．．．それは困るけど」

とんでもない事になったなと青ざめる顔の柏木。

結局この晩は、美和を泊めることになり、それがきっかけで、お互いに頻繁に会うようになった。

天真らんまん、好奇心旺盛で、美しい年上の女性．．．心が共鳴すると言つか、お互いにどどん魅かれ合って一線を越えてしまった。

* * * * *

．．．そして一年後．．．。

「ねえ、そうちゃん．．．」

「なに？」

「私ね、出来ちゃったみたい．．．」

「え．．．」

「大丈夫、旦那は気がついてないし．．．。でもね、隆昭もだんだん言葉も達者になってきて、物事の分別もつくようになったし、もう会つのがやめようかな．．．」

「なんだよ。俺達ってそんな関係だったわけ？俺は本気だったのに．．．」

「だって私、旦那もいるし、子供だって．．．。それに働いた事ないし．．．」

「旦那と別れて、俺と暮らせよ。隆昭も俺が面倒見るからさ」

「無理だよ。そうちゃんホストだし．．．」

「なんだよそれ．．．」

『ホストだし』の一言は、すごくショックだった．．．。そう言う目で見られてたのか？ 美和にとって自分は、ただの慰み者の存在でしかなかったのか？

「ねえ、最後にあなたの身に付けてる物ひとつちょうだい。私はこれあげる．．．。これは祖母の形見なの．．．。」

美和が柏木に渡したのは、首に下げていたアメジストのシルバーペンダントだった。

柏木が渡したのは、あの指輪だった．．．。

「旦那とは見合い結婚で、初めから愛情なかったし．．．。私が愛したのは、今もこの先も、あなたただ一人だけだから．．．。」

その言葉に柏木は救われた。

俺への気持ちは『本気』だったんだ．．．。じゃあどうして．．．。

『なんでなんだ！！』

「愛し合ってるのに、一緒に暮らそうと言ってるのに、何で別れないといけないんだと美和を恨んだりもしたけど、ホストだからって言われれば、それまでだし、私も若かったからね．．．。」

柏木は物憂げな顔をして、目を伏せた。

「それから私は、この場所にいるのが辛くて、暫くしたらここを離れて、大阪に移ったんだ。

その後店を出して、店舗数も増えて今に到ってる．．．。」

「それじゃあ、二人は心から愛し合って、私が生まれて来たのですね」

真帆が目を少しうるませて、柏木を見た。

「そうだよ。私は美和と真帆ちゃんと一緒に暮らしたかった・・・」
優しい表情で真帆を見る柏木。

「真帆の母さんはオーナーの事を愛してたのに、なんで、愛する子である真帆の事を・・・」
純哉がいぶかしげな表情をする。

純哉の話しを聞いて、柏木は心配そうに真帆の顔を見た。

「真帆ちゃんは、幸せな家庭で育ったんじゃないのかい？」

「あまり・・・。母は私をずっと嫌っていたと感じてました」

真帆は目を伏せて、辛そうな表情をした。

真帆は自分の今までの事を柏木に全て話した。

「随分と辛い目に会ってきたんだね。あの時美和も真帆も手放さなければ良かった・・・。」

大分後で分かったけど、美和は自分の言った言葉に後悔して、もう一度私に会いに来たらしいんだ・・・。

決心がなかなかつけられなくて、気持ち揺れていたんだね。

やはり、ご主人と別れて、私と一緒に暮らそうと思ったのかもしれない・・・。

でも、私は大阪に行った後だった・・・。

美和は俺が裏切って、消えたと思ったのかもしれない・・・。」

柏木の目は深く悲し気に、何処か遠くを見つめているような感じだ

った。

「今ふと思い出しましたが、母が『あなたを見てると辛い記憶が蘇って気分が悪くなる』って言った事が．．．。その時は分からなかったけれど、今はそう言う事だったんだって分かる気がします。」

でも、柏木さんの話しを聞いて、母はなんて我が儘で身勝手な人だったんだろって改めて思いました。

柏木さんが一緒になるうって言うてくれたのに．．．。

私だったら、好きな人の手は絶対に手放しません」

「真帆ちゃんは、霧夜の事が大好きなんだね」

柏木が優しい眼差しで真帆を見た。

「はい」

真帆は頬を染めて、真直ぐな目で答えた。

その言葉を聞いて、純哉が愛おしい目で真帆を見た。

「私、柏木さんとお話しして良かったです。」

なんだか気持ちに区切りが出来たって言うか、母の理不尽な態度や行動．．．。父との嫌な事、兄との嫌な事、何で私だけそんな目にあうのかって、私だけ見知らぬ国の異邦人のような、ずっと寂しくて孤独で辛くて、その訳が分からなくて．．．。

ずっと疑問に思って、手探りでさ迷っているようなそんな気持ちでしたが、はつきり訳が分かって、スッキリしました」

「実は、大阪から東京に戻って来て事業を始めて数年後．．．。

10年少し前だと思っけれど、美和と付き合っている頃、当時、私

が住んでいたアパートが気になって行ってみたら、美和とパツタリと会ってね．．．。

美和はあの場所に、時々思い出したように来ていたみたいだ。ずっとね．．．。

嬉しいはずだったけれど、何故か心が時めかなかつたよ．．．。

美和はすっかり変わってしまったて、我が儘だったけれど澁刺として明るくて、守ってあげたいようなそんな、私が愛した美和ではなくなっていたんだ．．．。

美和はその時は離婚した後で、お互いに独身だったけれど、もうやり直せる状況ではなくなっていてね．．．。

でも、子供の事が気になってたし、離婚して生活の事も心配だったし、生活に困らないぐらいのお金を援助させてもらったんだ」

「母が亡くなった時に、貯金通帳に億近いお金が残っていて、何でもそんなに高額のお金が？　って思っていたのですが．．．。柏木さんが母に送ったお金だったのですね」

「そのぐらい渡したし、そうかもしれないね。

美和はすっかり変わってしまったて、悲しいが、あの時のような燃え上がる愛情は時と共にいつの間にか消え去ってしまったけれど、真帆の事はずっと思っていたし、忘れた事もないよ．．．。

写真一枚貰えなかつたし、子供の事は一切教えて貰えなくて心配してたが、こつやって会う事が出来て嬉しいよ。

美和が亡くなった事は、かなり時間が過ぎてから知ってね、真帆の事を探す事も出来なくて．．．。

ずっと気掛かりだったんだ」

「私の事ずっと忘れないでいてくださって、凄く嬉しいです」
目を輝かせて、柏木に微笑みかける真帆。

この顔、俺の愛したあの頃の美和にそっくりだと、柏木はふと思っ
た。

そして突然現れた娘が愛おしい、父親の気持ちが高ぶった。

「その……。もし嫌じゃなかったら、今度3人で食事にも行か
ないか？」

「嬉しいです。是非お願いします……」
真帆が嬉しそうにっこり笑った。

「しかし霧夜が娘の夫だったとは……」
微妙な表情の柏木。

「俺こそ、オーナーが真帆の父親？ うーん。なんか微妙な気分で
す」

苦笑する純哉。

「お前が悪だった頃の事、全て知ってるからなあ……」
苦笑する柏木。

「そう言うオーナーだって……」
横目ですくい上げるような目で見える純哉。

「純哉は柏木さんの義理の息子って事に？」
真帆が驚きの表情……。

「父ちゃん」

純哉がいきなりオーナーに抱きつく。

「うわっ。気持ち悪っ」

ぶるっと思震いする柏木。

3人でお互いの顔を見合わせて、笑い合った。

(第14話に続く)

第14話 幸せの彼方へ

---フロールショップ KIRIYA

成城学園の駅近く、100坪の広い日当たりの良い角地の土地に、3階建ての店舗兼住宅・・・。

建物は、3階建ての南仏プロヴァンス風の輸入住宅・・・。

素焼きの輸入屋根瓦に、店舗二階部分窓には、イタリア製のアイアンの花台が付いており、四季折々美しい花が飾られる。

店舗一階窓側面部には、ロートアイアの美しい窓格子がつけられており、店舗入口前には素焼きのテラコッタタイルが広がり、色々な形の素焼きの鉢やプランターに、寄せ植えした植物や花々が並べられている。大きな木の押し車には、可愛いピクチャ、ガーデニンググッズが色々並べられて、まるで楽しいおもちゃ箱のようだ。

アンティークな『FLORAL SHOP KIRIYA』の看板が掲げられて、趣のある大きな木のエントランス両開き外扉がお客様を歓迎するように開かれて、その扉にはアンティークな『OPEN』のプレートが下がっている。

その両脇には、アレンジした寄せ植えのハンギングバスケットが下げられて、風にゆらめいている。

その扉を抜けると、自働ドア・・・。

内玄関壁面には、アレンジしたリースが沢山飾られている。

店の中は、入って左手前が真帆のビーズ&雑貨コーナー。

窓边には、真帆オリジナルのサンキャッチャー（太陽の光をクリスタルガラスのビーズで、小さな虹色に取り込む、光のアクセサリー）

が沢山下がっている。
それから、可愛い真帆オリジナルのビーズアクセサリーや、ストラップなどが沢山下がっていて、真帆のオリジナルレシピのキットやパーツなども色々。。。。
天井からは可愛いモビールや、輸入物の操り人形、アンティークな木の陳列棚には、癒されるような素敵な雑貨や、可愛い雑貨が並んでいる。

店舗左側奥は影虎&元ホスト2名が担当のセルフ式のミニカフェ。社交的で明るく影虎のトークを楽しみたい人は、カウンター席、ゆつくりしたい人は窓辺のカウンター席、中央には1枚板の長い広いテーブルがひとつ。

このテーブルで、真帆のビーズ教室が定期的に行われる。店内を楽しみながら見て回って、ここでお茶する人も多い。

店舗右側が、KIRIYA（純哉）のフラワーショップコーナー。

奥の方には、大きく広い1枚板の長テーブルが置かれていて、ここでKIRIYA（純哉）のフラワーアレンジメント教室が定期的に行われる。

大人気で、教室日程が発表されると同時にすぐ定員に達してしまうほど。

休憩時間には、影虎が入れた飲み物サービスが。。。。

純哉はKIRIYAと言う名前で、元カリスマホストのイケメンフラワーアーティストとして、テレビにも時々出るようになって、メキメキ人気が上がってきている。

あちこちの有名なホテルや店舗で、フラワーアレンジの注文も殺到して、忙しい毎日だ。

聖と他5名の元ホスが、店番に、配達やアレンジ、純哉のアシスタントなど手伝ってくれてる。

真帆意外は従業員全て、ピュアの元ホス．．．。
イケメンが沢山いるお店としても有名。

あ．．．そうそう、真帆のコーナーの手伝いに、元ピュアの異色ホスト、ニューハーフの真子が手伝ってくれている。

ホスト時代は可愛い系イケメンで、今はアイドル系の弾けた女の子に変化．．．。

ピースがとても大好きで、真帆の事を憧れのお姉様として崇拜している。

指先もとても器用で、センスもなかなかいいし、こまやかな気配りも利く、とても良い子だ。

それにニューハーフ．．．。

従業員に沢山イケメンくんが勢ぞろいで、彼達に会うのも楽しみ、もうここで働くのが嬉しくて仕方ない感じだ。

* * * * *

今日は水曜日で、お店は定休日。

「今日はどこにデートに行こうかな？」

純哉が変わらぬ優しい笑顔で、真帆を見る。

「お天気も良いし、広い公園に散歩にでも出かけましょうか？」

「いいね」

真帆の実父と再会したあの日から、数カ月．．．。
時々実父とも会って食事したり、交流も続き、穏やかな優しい時間
が流れている．．．。

公園の木々は色付き始め、秋の足音が近付いている。

花壇にはコスモスの花が一面に広がり、風に優しく揺れている．．．
。二人並んで、手を繋いで公園の小道をお喋りしながら、ゆっくり歩
く。

「ねえ。純哉から『スピード結婚しようぜ!』って強引に迫られた
時には、あたふたして何がなんだか分からない状態で．．．。
私ってスローペースでボーツとしている所があるでしょう?実は気
がついたら結婚してました!って感じだったの。」

「だけど、純哉の言う通り交際期間ワープして、結婚して良かったな
って思うわ。私、ずーっと幸せなもの．．．。」

「良かった。後悔されたら凄くショックで悲しいからさ」

「でも、何でそんなに慌てて結婚を急いだのか?ちよつと謎だわ。
もしかして私がおばさんで、結婚適齢期オーバーしてるから?」
ちよつと不審そうな顔で、純哉を見上げる真帆。

「うーん。真帆と1分1秒でも早く一緒になりたかったんだ。
俺には真帆しかいないって、ピピピッと電気が走ってさ．．．。」

「ふーん。もしかして、早く結婚しないと赤ちゃん生めなくなつち
やうからとか?」
ちよつと突っかかる真帆。

「正直言つと、それも無きにしもあらずだが……。出来なくてもさ、夫婦二人でだつて構わないしさ……」

「でも、やっぱり出来たら欲しい？」
更にその話しに拘る真帆。

「まあな、欲しいけれどさ、いなくても真帆さえいればさ……」

「でも、出来たら欲しい？」

しつこくその話しに拘る真帆……。

「なんか今日は妙にその事に拘るな。気にしてるのか？そんな事全然気にしなくてもいいんだからな。あまり拘つてないし……」

「でも、やっぱり欲しいでしょ？」

「今日はどうしたんだよ」

「出来たら嬉しい？」

「まあな」

怪訝そうな困ったような顔の純哉。
余計な事を言つて、真帆の心を傷つけないようにと思つて言葉を選んでるのだが……。

「あのね、私、出来たみたい……」

「え？ あ？ お？ うそーっ」

パニック状態の純哉。

「実は薬局で買ってきて、検査してみたら反応があったから・・・。これから病院に一緒に行ってくれませんか？」

「モチだつて！！やったー。バンザイ！！」

純哉の絶叫が響き渡り、周りの人が一斉に注目する。

病院に行ったら、妊娠2か月だと言う事が分かった・・・。

「明日から仕事休むか？安静にしてないと・・・。」
嬉しくてうきうきな気持ちと、心配な気持ちでいっぱい純哉。

「病気じゃないから、大丈夫よ無理しないし・・・。」

「本当に無理するんじゃないぞ」

「大丈夫！！」

* * * * *

・・・時は巡り・・・。それから10年後・・・。

『FLORAL SHOP KIRIYA』は今日も大盛況・・・。
裏の住宅スペースの玄関から10歳ぐらいの可愛らしい女の子と5歳ぐらいの可愛らしい男の子が飛び出してきた。

「グランパがきたーっ！！」

「グランパーッ！！！！」

飛び出してきた女の子と男の子は、ド派手な大型RV外車から降り

てきた、サングラスをかけたモデルの様な渋い紳士に二人して飛びついた。

彼は、真帆の父、柏木だ．．．。

「風花^{ふうか}、泰樹^{たいき}、今日はいっぱい楽しもうなー」

そして．．．RV外車から上品で素敵な中年のご婦人も出てきた．．．。

「グランマーツ！！！」

「グランマ」

あの麻生夫人だ．．．。

母1人息子1人で、純哉と同じ年の1人息子を亡くして、ずっと1人で会社を経営して来たが、真帆と純哉が結婚した縁で、真帆の父柏木と知り合い親しくなり、ついには熟年結婚となった。

息子のように可愛がってきた純哉が、本当の義理の息子になって、かわいい孫二人のおばあちゃんにもなった訳だ．．．。

今日はおじいちゃん、おばあちゃんと孫二人で 夢と魔法ランドにお泊まりで遊びに行く所だ．．．。

「お父さん、お母さん、風花と泰樹の事よろしくお願いしますね」

「ああ．．．孫達と楽しみだよ．．．。」

風花と泰樹を両手に抱き上げて、柏木が幸せそうに微笑む。

「真帆ちゃんと純哉くんも、仕事が終わったら、夫婦でゆっくり過ごしてね．．．。」

義理の母になった麻生夫人が、優しい笑顔で二人に言った。

純哉と真帆と、笑顔で目を見交わす・・・。

「じゃあ久し振りに、食事にでも行くか？」

「うん。楽しみ・・・」

かわいい孫2人を乗せ、真帆の実父柏木と母になった麻生夫人を乗せて、ワイワイ賑やかな感じに車は国道の方へと消えていった。

子供達は、見えなくなるまで、母と父である、真帆と純哉に笑顔で手を降っていた。

車が見えなくなった後、真帆がポツリと言った・・・。

「ねえ、私今でも・・・そして、きつとこの先もずっと幸せ・・・」

「俺だって・・・真帆と出会って結婚してからずっと幸せ・・・」

暫く微笑み合って、見つめ合う二人・・・。

「店長ーっ。お客さんツすよ」

影虎が、店から走って呼びに来た。

「分かった・・・じゃあ今夜、食事に行こうな」

「うん」

「あ．．．酔っぱらったらさ、おぶってやるからな」

「ひどーい。そんなに飲ん兵衛じゃないわよ」

「酔っぱらうと可愛いからさ、飲ませちゃおう．．．」

「まあっ！！」

その二人のやりとりを見ていた影虎が．．．

「はいはい．．．。おのろけはそこまで．．．。仕事っすよ」

「わかったよ！！！」

ちよつと膨れっ面で、お店に走って行く純哉．．．。

真帆は純哉の後ろ姿を見て、変わらず素敵だな．．．としみじみ思った．．．。

「ふふふ．．．影虎君の奥さん、間もなく出産ね」

「はいっ！！楽しみっす！！！」

影寅の奥さんは、ミニカフェでバリスタとして働いていた、ボーイツシユな可愛い女性だ。

出産を機に、仕事を辞めて専業主婦になった。

「出産祝い何がいいかな？」

「そんな気を使わなくていいっすから．．．」

影虎と店に入りながら、真帆は思った．．．。
私って本当に幸せだな．．．。

今日も元ホスのピユアのメンバー達は元気に楽しく仕事をしてる・
。

愛しい純哉も笑顔で接客中・・・。

これからも・・・この先も・・・あなたと一緒に歩いていくね。

あの日、私を見つけて、背中に素敵な翼を付けてくれた人・・・。
純哉・・・あなたと・・・。

(・・・完・・・)

第14話 幸せの彼方へ（後書き）

ご愛読くださり、ありがとうございました。

実はホストクラブに行った事がなく、第1話の『club ピュア』の店内の様子は色々調べて想像で書きました。

実際の様子とは違いかもしれませんが、お許しください。

^ ;)

(^ |

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3512t/>

アンバランスカップル

2011年7月17日22時47分発行